宮城県文化財調査報告書第220集

石森館跡

平 成 21年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

金装板碑

序　　文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきが強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、県道石森永井線道路改良事業に先立って実施した石森館跡の発掘調査報告書です。今回の調査により遺跡の成果を解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 21 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長　小　林　伸　一

例　　言

1．本書は、平成20年度に宮城県東部土木事務所との協議に基づき実施された、県道石森永井線道路改良事業計画に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査および整理、報告書の作成に当たっては、次の方々からご指導、ご助言を頂いた（敬称略）。

安達訓仁、池田敏宏、笠原卓見、佐藤信行、佐藤愉一、千葉孝弥、藤沼邦彦

4．本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図「佐沼」「米谷」を複製して利用した。

5．本書における土色の記述については「新版標準土色帳」（小山・竹原1973）を利用した。

6．測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。

7．本書で使用した遺構略号は、以下の通りである。

SB：掘立柱建物跡　SD：水濠跡・溝跡　SE：井戸跡　SK：土坑　SX：整地層・溝状遺構

8．本書の作成は、調査を担当した各調査員の協議を経て、佐藤貴志・久保井裕之が資料整理にあたり、佐藤が編集・執筆した。

9．本遺跡の調査成果については、現地説明会や宮城県遺跡調査成果発表会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

10．調査の記録や整理に関する資料および出土品については、宮城県教育庁文化財保護課が一括して保管している。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
１．石森館跡の位置……1
２．石森館跡周辺の歴史的環境……1
３．石森館跡の歴史……1
４．石森館跡の現状と推定される構造……3
第Ⅱ章　調査に至る経過と調査の方法……5
第Ⅲ章　地形と基本層序……5
第Ⅳ章　発見された遺構と遺物……9
１．縄文時代……9
２．古　　代……10
３．中・近世……13
（１）発見された遺構　……13
（２）発見された遺物　……25
第Ⅴ章　総　括……31
第Ⅵ章　まとめ……33
参考・引用文献……34
付篇……35
写真図版……43
報告書抄録……52

調　査　要　項

遺 跡 名：**石森館跡**（いしのもりたてあと）（宮城県遺跡記載番号：54001）

遺跡記号：ＲＳ

所 在 地：登米市中田町石森字前田地区

調査原因：県道石森永井線改良工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課　佐藤貴志　久保井裕之　村上裕次　初鹿野博之
登米市教育委員会　小野寺智哉

調査協力：登米市教育委員会

調査期間：平成20年５月26日（月）～８月28日（木）

調査面積：事前調査（道路部分）2085m² 確認調査（民地部分）385㎡　総面積2470m²

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

１．石森館跡の位置

石森館跡（別称「笠原館」）は、登米市中田町石森字前田に所在する。登米市役所から北東へ約４kmの地点にある。

本館跡が所在する中田町（旧登米郡中田町）は、仙台市から北東へ約70kmの県北東部に位置し、北は岩手県西磐井郡花泉町に接している。地理的には仙北低地帯の北端にあたり、西部を迫川の支流である夏川、東部を北上川が流れており、両河川沿いに自然堤防や低丘陵が散在しているほかは、起伏の少ない標高８～10mの平坦地である。

本館跡は中田町の北西部に位置する石森地区にあり、石森小学校東側の、夏川によって分断された石越丘陵の一部に属する標高21～24mの石森館山（御居館山）上に立地する。この独立した小高い丘陵全体が館跡である。

２．石森館跡周辺の歴史的環境

中田町内では、縄文時代から近世までの遺跡が多く存在している。二ッ木貝塚や石森遺跡などの縄文時代の遺跡や、白地横穴墓群などの古墳時代の遺跡、近世では祭祀遺跡である大壇遺跡などがある。

町内にある遺跡の半数近くは中・近世の館跡であり、20の館跡が存在する。これらは自然堤防ないしは小高い丘陵上に立地し、町内ほぼ全域に広がる。本館跡の１～２km北東には二ッ木館跡（双樹館跡）や小塚館跡がある。平成14年、二ッ木館跡に程近い十二神山遺跡の発掘調査が行なわれ、空堀跡や建物跡が検出されたほか、調査区周辺で板碑・線刻五輪塔などが見つかった。

また、中田町内には鎌倉期～室町期に至る各時代の板碑が多数残されている。本館跡が立地する石森館山に限ってみると、16基の板碑がある（中田町史編さん委員会2004）。この中のひとつ、弘安三年（1280）の板碑は町内に現存する最古のものと言われている。

『登米郡史』には、明治25年本館跡から40基の板碑が発掘されたことが記されており、それらの中には「朱を施せるもの一枚、金箔せるもの三枚」あり、また「年号の明瞭せるもの二十枚中南北朝ものは悉く北朝の年号」であるという。現在、この多くは所在不明である。

３．石森館跡の歴史

『石森村明治風土記』には、平泉藤原氏時代すでに石森館が存在し、奥州合戦（1189年）時には藤原秀衡の家臣猪塚修理清明が居住したとの記載がある。

中世に入ると当地方は葛西氏の領有となり、石森館はその領地支配の拠点のひとつを担うようになった。中世における館主の記録としては、承久三年（1221）葛西氏の家臣右近将監康次が、当館に拠って石森氏を称したとある。天正十八年（1590）には、秀吉の奥州仕置によって葛西領は没収され、康次の末孫である晴康・則安・堯明らも主家とともに没落した。

葛西・大崎旧領は、秀吉の家臣木村吉清・清久父子に与えられたが、彼らの暴政に対して「葛西大

№.	遺　跡　名	立　地	種　別	時　代	№.	遺　跡　名	立　地	種　別	時　代
1	石森館跡	丘陵	城館・散布地	中世・近世・古代	22	新内ノ目遺跡	沖積平野	散布地	縄文前
2	古塚壇遺跡	自然堤防	塚	近世	23	上沼古館跡	沖積平野	城館	近世？
3	霜降館跡	自然堤防	城館	中世	24	上沼館跡	沖積平野	城館	中世
4	双樹山秀山寺跡	丘陵	寺院		25	朝日館跡	丘陵	城館	中世
5	十二神山遺跡	丘陵	散布地･集落･板碑群	縄文晩・奈良・中世	26	王の墓遺跡	沖積平野	墓	中世？
6	大壇遺跡	丘陵	祭祀遺跡	近世	27	円福寺跡	丘陵麓	寺院	中世
7	石森遺跡	丘陵	散布地	縄文	28	石森古館跡	自然堤防	城館	中世
8	愛宕山寺跡	丘陵	寺院		29	本道寺跡	自然堤防	寺院	近世？
9	二ツ木貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文中～晩	30	加賀野館跡	自然堤防	城館	中世
10	二ツ木(双樹)館跡	丘陵	城館・散布地	縄文・古代・中世	31	西明寺跡	自然堤防	寺院	近世？
11	西方庵跡	沖積平野	寺院		32	伊神館跡	自然堤防	城館	近世
12	白地横穴墓群	丘陵	横穴墓群	古墳後・奈良	33	黒沼館跡	自然堤防	城館	近世
13	小塚館跡	丘陵	城館	中世	34	新井田新館跡	自然堤防	城館	中世
14	桜場館跡	自然堤防	城館	中世	35	小島館跡	丘陵	城館	中世
15	八幡寺跡	自然堤防	寺院	近世？	36	佐沼城跡	丘陵	城館・集落	縄文晩・古墳・平安・中世・近世
16	山根前横穴墓群	丘陵麓	横穴墓群	奈良・平安	37	西館跡	丘陵	城館	中世
17	登戸館跡	丘陵	城館	中世	38	紫雲山遺跡	丘陵麓	散布地	古代
18	羽竜山遺跡	丘陵麓	散布地	古墳？	39	首壇	丘陵	壇	中世
19	東郷古館跡	丘陵	城館	中世	40	佐沼大東遺跡	自然堤防	散布地	平安
20	弥勒寺館跡	丘陵麓	城館	中世	41	大綱遺跡	自然堤防	散布地	平安
21	西郡古館跡	丘陵斜面	城館	中世					

第１図　石森館跡と周辺の遺跡

崎一揆」が勃発する。これを鎮めた伊達政宗が、これ以降当地方を支配することになる。寛永二一年(1644)、伊達氏の家臣笠原出雲盛康が江刺郡角懸村と石森村の領地替えを希望し許可され、当館に移り住み、石森を知行することになる。この時点で禄高は850石だった。のち盛康の跡を継いだ義康の代には1613石を有するまでに成長する（中田町史編さん委員会2004)。

４．石森館跡の現状と推定される構造

石森館跡は小丘陵全体が館跡となっている。遺跡の範囲は、本館跡の西側は石森小学校建築時に大きく削平され低くなっているものの、現存する水濠や用水路を手がかりに推測すると、東西約450m×南北約300mに及ぶ。現在はわずかな山林（杉林・竹林）以外ほとんどが宅地・畑地などで、大きく後世の改変が加えられている。

石森館については、中世期の様子を示すものはないが、江戸期のものとして天和元年（1681）に描かれた「登米郡石森村笠原縫殿在郷屋敷絵図」が残存している。

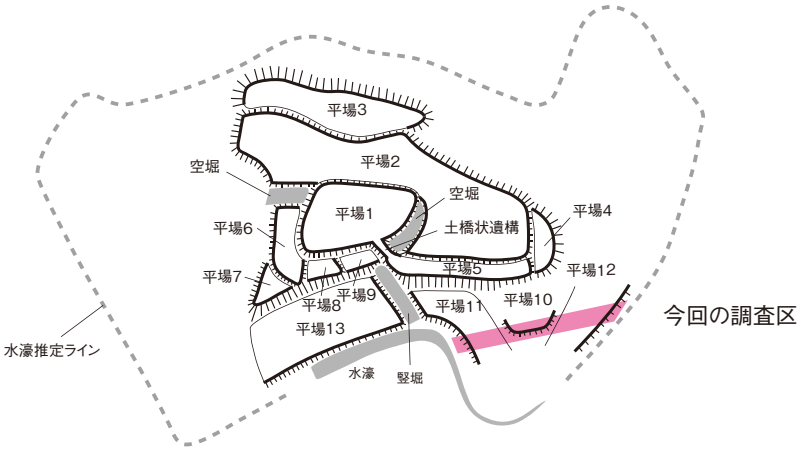
この絵図によると、当館は丘陵中央部に位置する笠原氏の「居屋敷」を中心として、その外側を「家中屋敷」が取り囲み、さらにその外側に「越不り（おほり)」を巡らせた構造である。細部についてみると、楕円形を呈する「居屋敷」の縁辺部には、北と南の２ヵ所に外へ通じる四脚門が描かれている。南門から外へ延びる通路は、位置的に石森小学校東側の個人宅への通路にあたるものと思われる。「居屋敷」のまわりの「家中屋敷」は不整形に広がり、所々「竹林」となっている。「越不り」は、当館の西半部を鉤の手状、東半部を弧状に画している。館内に土塁・空堀などは描かれていない。

当館周辺の様子をみると、道路沿いには「新町」「中町」「南町」という町屋や「家中屋敷」が連なっている。これは、『登米郡石森村風土記御用書出』にある宿場町「石森町」とされている（中田町史編さん委員会2004)。絵図に描かれている道路は、現在の石森集落を通る道路とほぼ一致する。

現況をみると、山頂にある平場１が主郭と考えられ、宅地となっている。長楕円形を呈し、規模は東西約70m、南北約40mある。空堀跡は主郭の南東部にみられ、幅６～８ｍある。ほかに主郭北西部から西へ延びる空堀跡が認められる。これらは本来一連の空堀で、主郭の北～東辺を画していた可能性がある。現状では、平場１と平場２のあいだには明確な段差などは認められず、緩やかに傾斜しながら平場２に繋がる。主郭西～南辺は、急な斜面となっている。南辺中央部には長さ約５ｍの土橋状遺構があり、下段の平場５との連絡路となっている。この土橋状遺構付近から斜面下の水濠にかけては、ほぼ直線的に延びる竪堀跡がみられる。長さは約40mである。

平場２は、主郭の北側から東側にかけて広がる平坦地である。東側が緩やかに傾斜し低くなるが、この平場内で明確な段差が認められない。しかし、幅30～50m、長さ約200mにわたって広がるかなり大きな平場であることから、この区域はいくつかに区切られていた可能性がある。平場２の北・東・南辺には細長い平場３～５、平場１の西～南辺には連続する段差状の平場６～９がある。平場５および平場７～９の南辺は３～４ｍの比高差のある急斜面となっている。

平場10は、南へ延びる丘陵尾根の先端部にある。この平場10の西および東には丘陵裾に広がる平場11・12がある。同じく丘陵裾にある平場13は、東西約100m、南北約40mの長方形を呈する比較的大



（昭和57月編集　宮城県迫土地改良事務所）

第２図　石森館跡の模式図と調査区の位置

きな平場である。

平場13の南には幅７～８ｍの水濠が残存し、一部には石垣もみられる。この水濠は、東側で「¬」状に折れ、丘陵南東部の張り出しに沿って幅を狭めながら約200m延びている。

以上のことから、石森館跡の構造としては館の周囲に水濠を巡らせ、丘陵頂部の主郭を中心に大小複数の平場で構成される連郭式と言える。

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の方法

本調査は、県道石森永井線道路改良事業計画に伴うものである。

道路建設予定地は、周知の遺跡である石森館跡にあたることから、平成12年11月遺構の存在の有無や遺跡の広がりを把握するための確認調査を行った。調査対象地内に東西方向のトレンチを任意に設定し、掘り下げを行った。その結果、古代の竪穴住居跡、柱穴群および中・近世の柱穴群、水濠跡、整地層などの遺構が発見され、周辺から古代の土師器・須恵器などの遺物が出土した。このことを受けて東部土木事務所と協議を行い、計画変更が難しいことからやむを得ず事業に先立ち発掘調査を実施することになった。また事業計画では道路脇の民有地を盛土補償することになっていることから、この区域について遺構は損なわれないが館跡の内容をより正確に把握するために、確認調査を実施することとなった。

なお、道路建設予定地の西端にあたる水濠部分と東端の現道部分については、建設工事にあわせて補足調査を実施するのが効率的であると判断し、今回の調査対象から除外することとなった。

道路部分の事前調査区は、南北15～20m×東西110mの長方形状を呈し、調査面積は約2,085㎡、民有地部分の確認調査区は、幅２～３ｍ×長さ10～30mの９本のトレンチ調査で、調査面積は約385㎡である。今回の総面積は約2,470㎡である。

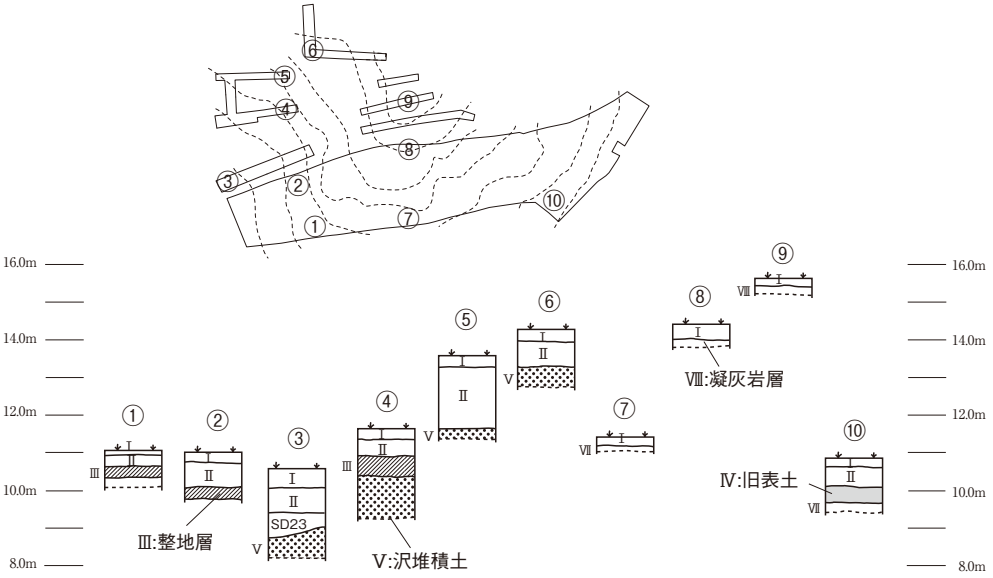
発掘調査は、平成20年５月26日から開始した。遺構検出面まで重機で掘り下げを行い、その後遺構の精査を行なった。調査区西側については、前回の試掘調査で中・近世の整地層が確認され、下層には古代の遺構が存在することもわかっていたので、まず整地層上面の精査を行い、その後手掘りで整地層を除去した上で、整地層下面および古代の遺構精査を行なった。

精査した遺構の平面図は、電子平板を用いて作成した。断面図は縮尺1/20で作図した。また、デジタルカメラ・６×７cm白黒およびカラーフィルムによる記録も併せて行なった。

調査終了が間近い８月23日（土）には、登米市教育委員会の協力を得て、地元住民を対象とした現地説明会を開催し、約100名の参加者を得た。同月26日（火）には、石森小学校の５・６年生を対象とした校内説明会を行った。調査終了は８月28日で、調査に要した期間は約３ヶ月である。

第Ⅲ章　地形と基本層序

現地形と先の絵図を対比してみると、今回の調査地点は館の南東部に位置し、「家中屋敷」が置か



第３図　基本層序

れていた区域で、第2図の平場10・11・12にあたる。地形的には、丘陵南東部の南に向かって舌状に張り出した標高10～16mの丘陵上にある。調査区の中央に南へ延びる尾根があり、ここから緩斜面が西・南・東側に広がっている。また、調査区西側には、現存する水濠の屈曲部分から北東に入り込む小さな沢がある。調査区の大部分は後世の造成が及んでおり、丘陵尾根部分は基盤の軟質凝灰岩層まで深く削られ、斜面部は盛土造成されていた。

調査区全域で共通して確認できた堆積層は少ないが、以下のように層序関係をまとめることができる。

Ⅰ：現表土および耕作土。層厚20～30cm。

Ⅱ：近代以降の造成に伴う盛土や耕作土など。調査区中央の丘陵尾根部分を除くほぼ全域に分布する。堆積状況から、造成は何時期かにわたって行なわれていると判断できる。層厚70～120cm。

Ⅲ：整地層。中・近世の遺構確認面。調査区の西側に分布し、沢の堆積土および削り出した地山面を覆っている。

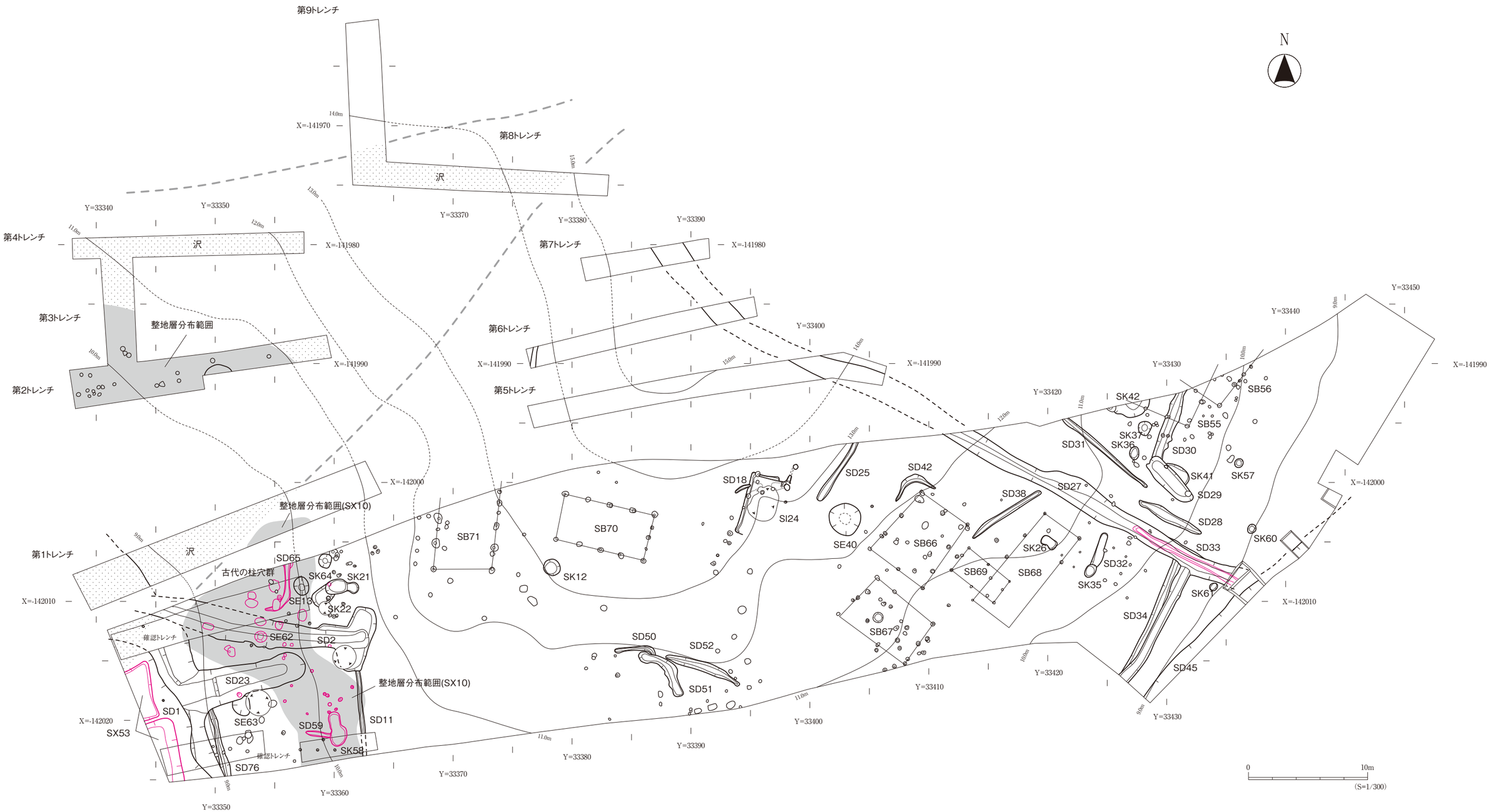
Ⅳ：旧表土（黒褐色土）。事前調査区の東側のみに分布する。

Ⅴ：沢地の自然堆積層（黒色粘土層）。調査区の西側に分布する。上層は湿地性の堆積状況を示し痕跡的に粒状の灰白色火山灰が残存する。下層は極めて泥炭に近い未分解の植物遺体を含む。

Ⅵ：にぶい黄褐色シルトの自然堆積層。調査区南西部のみに分布する。

Ⅶ：丘陵基盤の凝灰岩の風化した小礫を含む黄褐色～黄灰色の粘質シルト（地山面）。丘陵裾ほど粘性が強くなる。調査区のほぼ全域に分布する。調査区中央など近世以前の堆積土が残存していない部分での中・近世および古代の遺構確認面。

Ⅷ：凝灰岩層：深く削平が及んでいる調査区中央の丘陵尾根部分で確認した。


N
第9トレンチ
第8トレンチ
第7トレンチ
第6トレンチ
第5トレンチ
第4トレンチ
第3トレンチ
第2トレンチ
第1トレンチ
沢
整地層分布範囲
整地層分布範囲(SX10)
古代の柱穴群
確認トレンチ
X=-141970
X=-141980
X=-141990
X=-142000
X=-142010
X=-142020
Y=33340
Y=33350
Y=33360
Y=33370
Y=33380
Y=33390
Y=33400
Y=33410
Y=33420
Y=33430
Y=33440
Y=33450
SK42
SB56
SB55
SK37
SK36
SD30
SD31
SK41
SK57
SD29
SD27
SD28
SD33
SK60
SD32
SK35
SK61
SD34
SD45
SD42
SD38
SB66
SB69
SB68
SK26
SB67
SD25
SE40
SD18
SI24
SB70
SK12
SB71
SD50
SD52
SD51
SD65
SK64
SK21
SE15
SK22
SE62
SD2
SD23
SE63
SD59
SK58
SD11
SD1
SX53
SD76
0
10m
(S=1/300)

第４図　遺構全体図

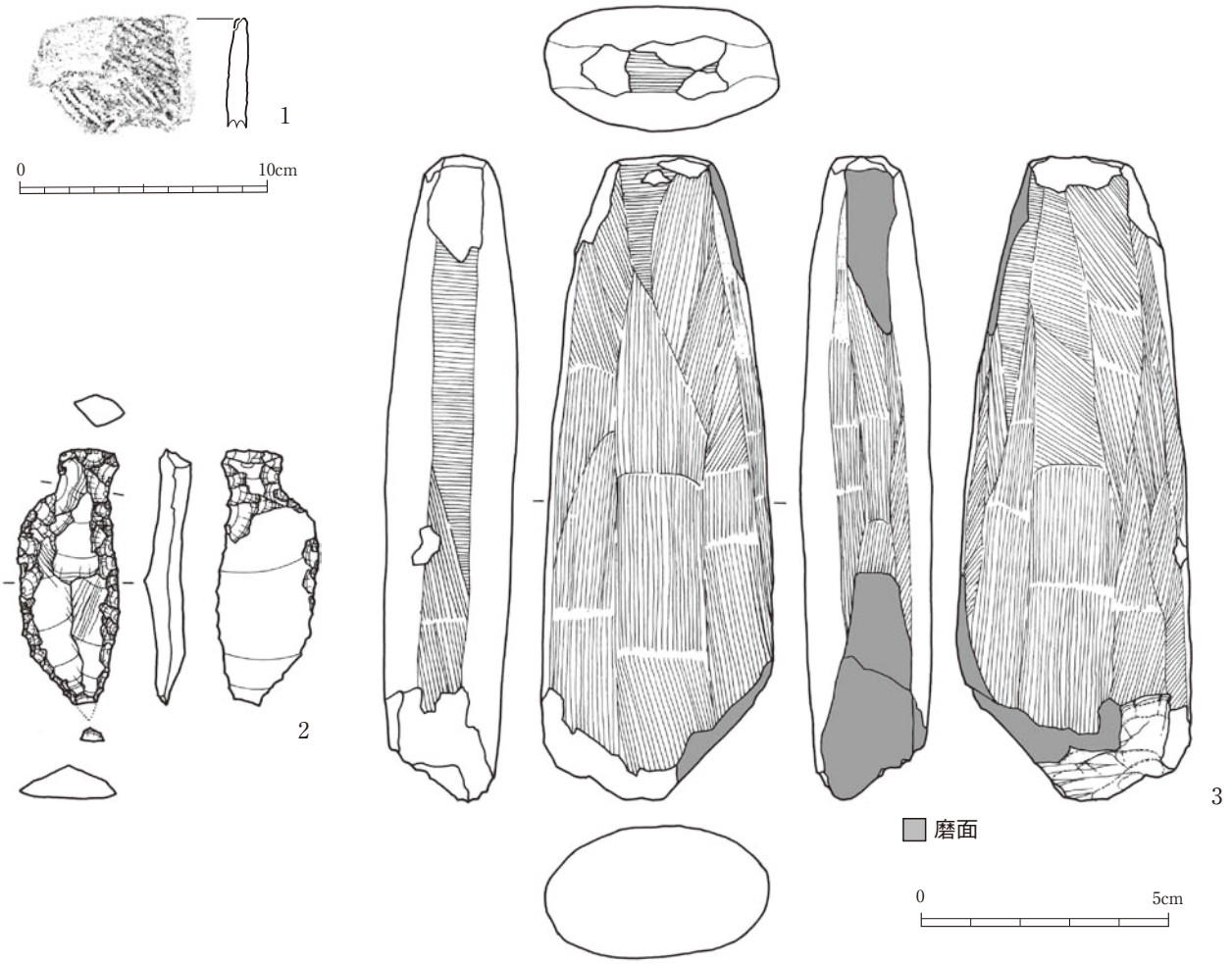
第Ⅳ章　発見された遺構と遺物

今回の調査で確認した遺構・遺物は、古代と中・近世の二時期に分けることができ、ほとんどが館跡に関わる中・近世のものであった。その他、極少量ながら縄文時代の土器・石器が出土した。

以下、時代ごとに説明を行う。なお、南の事前調査区（道路部分）を「Ｓ区」、北の確認調査（民地部分）を「Ｎ区」とし、さらにＳ区については、中央の尾根部分を「Ｓ区中央」、その西側斜面を「Ｓ区西」、東側斜面を「Ｓ区東」とし、４つの区域に分けて説明する。

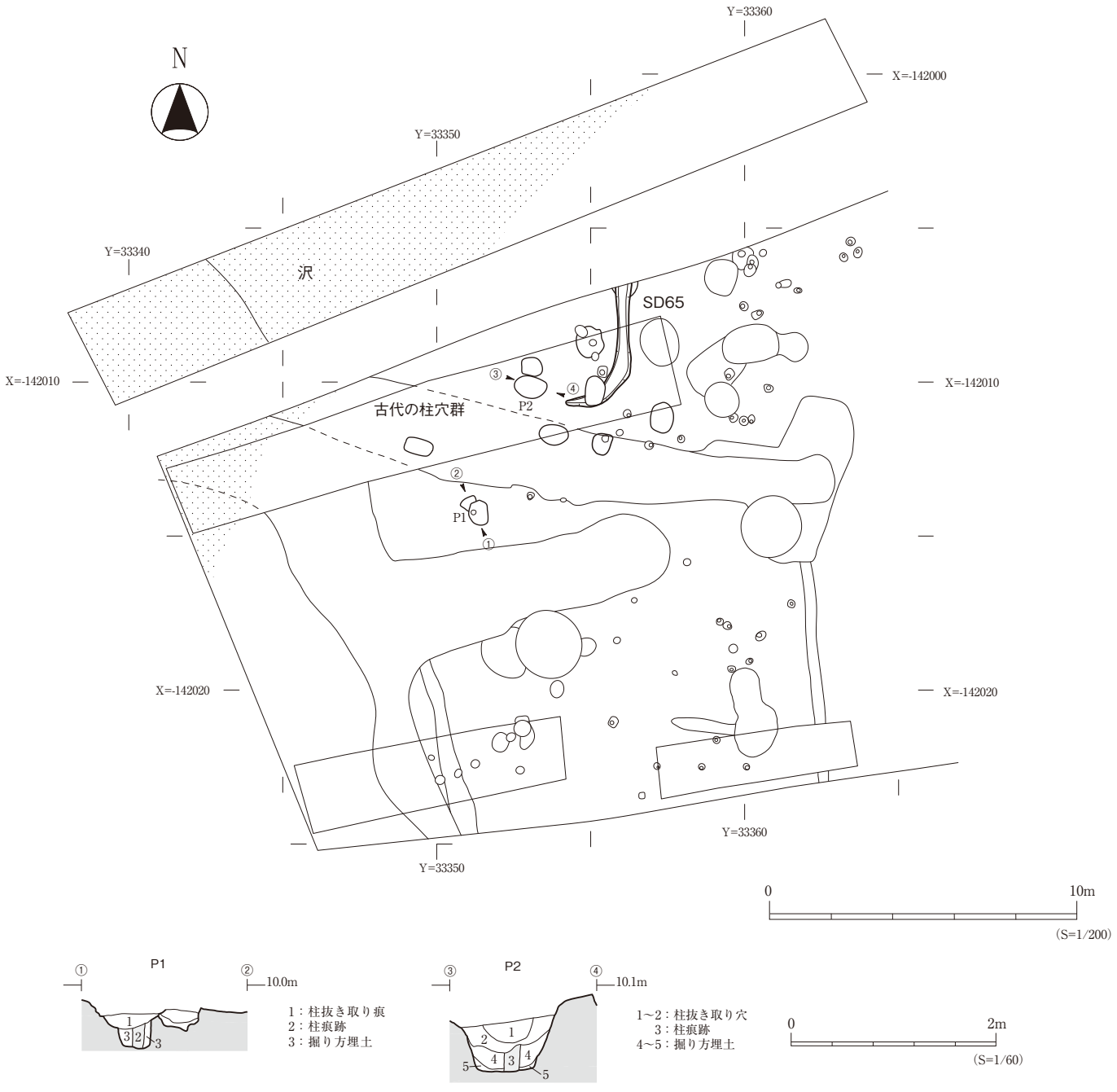
１　縄文時代

中・近世の遺構堆積土や沢の堆積土から、縄文時代の土器片1点、石匙１点、磨製石斧１点が出土した。縄文時代の遺構は確認されていない。



番号	種　別	出土地点	特　　徴	写真図版	登録
1	縄文土器	Ｓ区東ＳＤ 45 水濠跡堆積土	深鉢口縁部。斜行縄文（RL）。	5-1	18
2	石匙	Ｎ区第２トレンチ沢堆積土	珪化凝灰岩製。縦型、先端わずかに欠損。長さ 5.1cm　幅 2.1cm　厚さ 0.7cm　重さ 7.1 ｇ。	5-2	24
3	磨製石斧	Ｓ区西ＳＤ 23 溝跡堆積土	長さ 13.0cm　幅 4.7cm　厚さ 2.7cm　重さ 259.0 ｇ。緑色凝灰岩製。	5-3	15

第５図　縄文時代の遺物



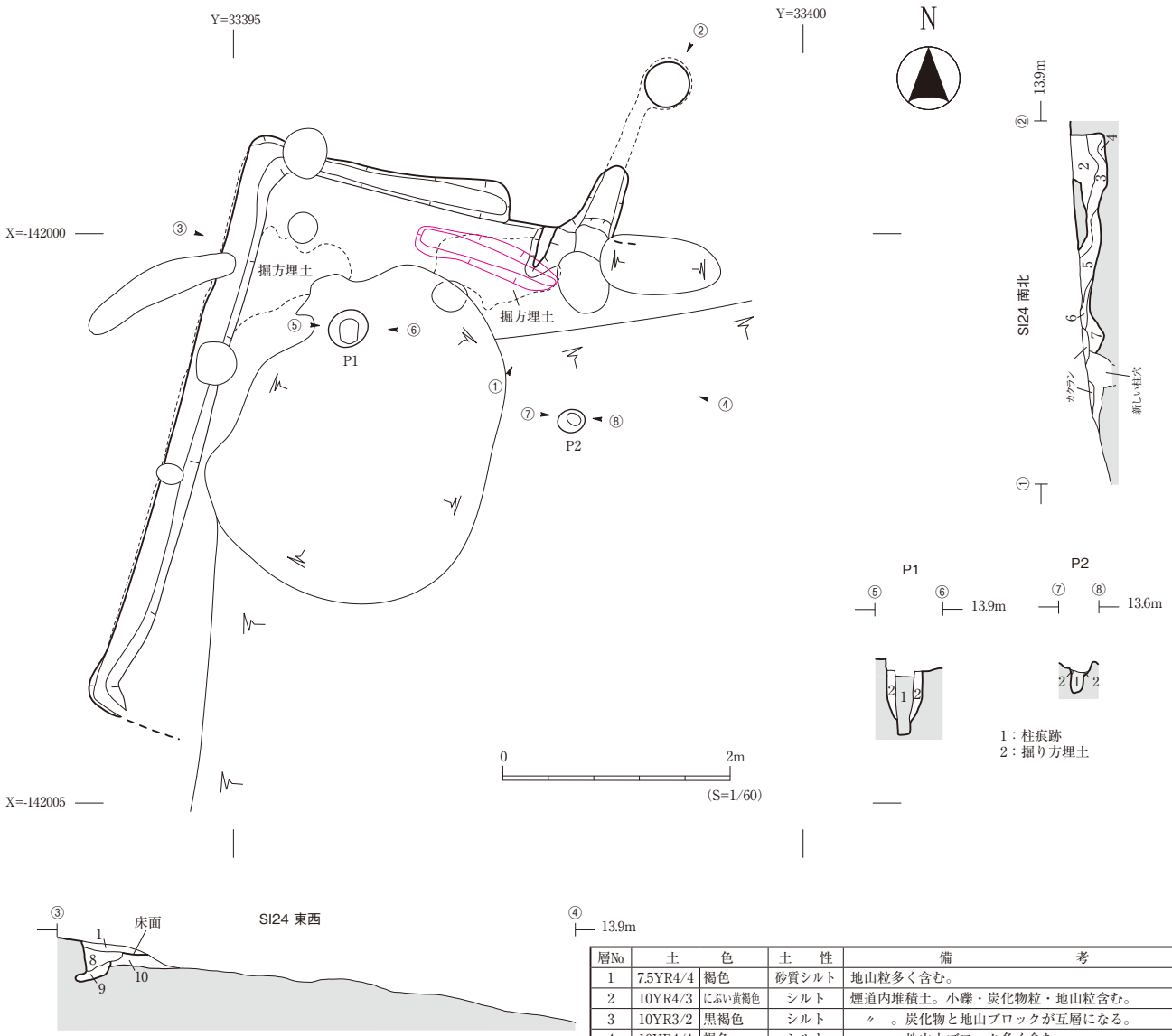
第６図　Ｓ区西　古代遺構平面図・断面図

２　古代

古代の遺構は、Ｓ区西で溝跡１条と柱穴群、Ｓ区中央で竪穴住居跡１軒を確認したのみである。遺物は、Ｓ・Ｎ区の広い範囲から土師器・須恵器が見つかっている。

Ｓ区西

検出遺構は溝跡１条と少数の柱穴で、調査区北寄りの沢への落ち込み部分に分布する。整地層下の基本層序Ⅶ層で確認し、平面形や堆積土の特徴から古代の遺構と判断した。北に隣接する第１トレンチでは、古代の遺構は確認されなかった。



層No.	土色		土性	備考
1	7.5YR4/4	褐色	砂質シルト	地山粒多く含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	煙道内堆積土。小礫・炭化物粒・地山粒含む。
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	〃 。炭化物と地山ブロックが互層になる。
4	10YR4/4	褐色	シルト	〃 。地山小ブロック多く含む。
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	〃 。焼土・地山小ブロックやや多く含む。
6	2.5YR5/6	明赤褐色	砂質シルト	〃 。焼土層。炭化物粒含む。
7	7.5YR4/3	褐色	シルト	カマド内堆積土。焼土・地山小ブロック多く含む。層下部は炭化物層。
8	7.5YR4/4		砂質シルト	周溝内堆積土。地山ブロック多く含む。壁材抜取痕か。
9	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	〃 。地山小ブロック（岩盤）非常に多く含む。
10	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	住居掘り方埋土。地山小ブロック（岩盤）非常に多く含む。

第７図　ＳＩ24竪穴住居跡

【柱穴群】11個の柱穴を確認した。柱穴の平面形は楕円形ないしは隅丸方形で、径もしくは一辺が35～50cmである。埋土は、地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトを主体とする。一部には約10cmの円形の柱痕跡や、柱抜き取り痕が認められる。

【SD65溝跡】弧状を呈する溝跡である。幅30～60cm、深さ10～15cmと小規模な溝である。さらに調査区外へ延びる。堆積土は1層で、地山粒を含む暗褐色粘土質シルトの自然堆積土である。

Ｓ区中央

検出遺構は遺存状況の悪い竪穴住居跡１軒のみである。

【SI24竪穴住居跡】やや東寄りで確認した。削平が著しく北辺部および西辺部がかろうじて残存し

ているのみである。遺構確認面は、現地表面下約40cmの基本層序Ⅶ層である。

［平面形・規模］残存長東西3.3m、南北5.1mで、方形状を呈するものと思われる。

［方向］西辺でみると、北で東へ16°偏する。

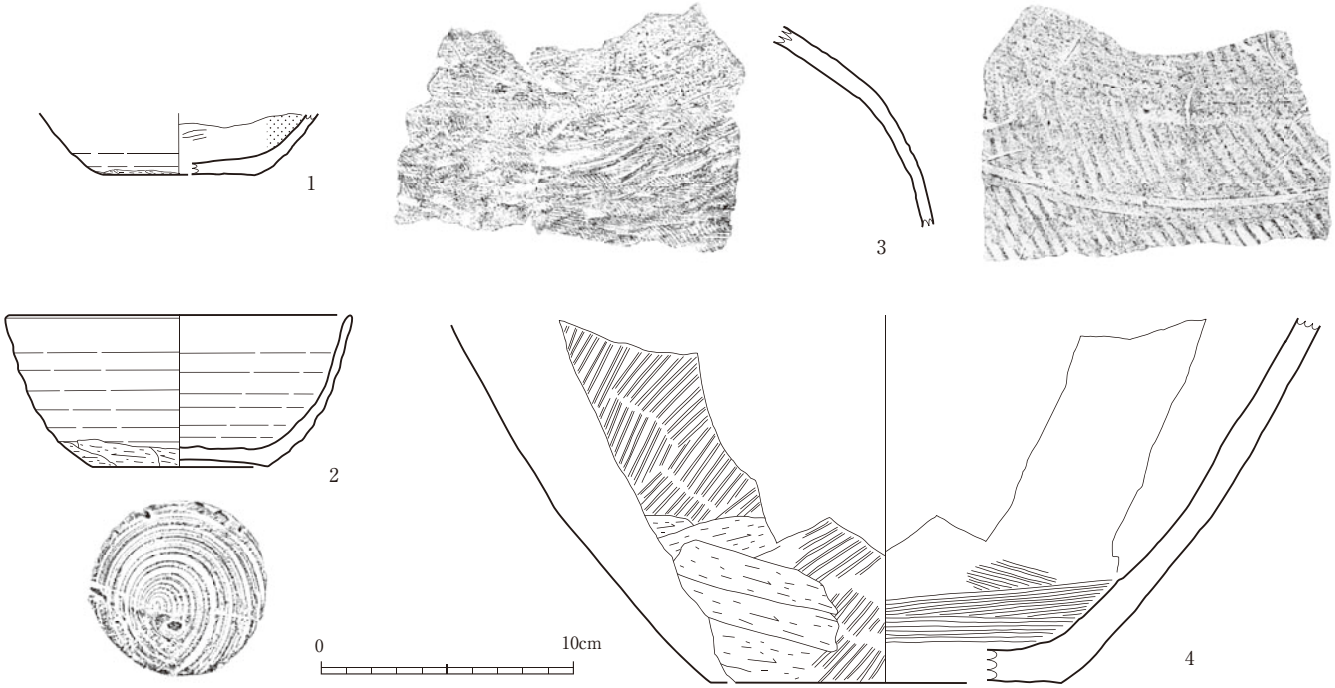
［壁］床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、北壁で床面から約10cmである。

［床面］北西部以外完全に削平されている。掘り方埋土と地山面を床面としている。

［柱穴］２個（Ｐ１・２）検出した。本来は住居平面形の対角線上に、４個配置されていた主柱穴とみられる。Ｐ１は径約30cmの円形で深さは約65cm、Ｐ２は径約20cmの円形で深さは約20cmである。いずれの柱穴にも径10～15cmの柱痕跡が認められる。

［カマド］北辺に付設されている。攪乱と新しい柱穴によって壊されており、側壁の一部、煙道、煙道天井部が残存するのみである。焼面は確認されなかった。左側壁は、地山粘土を含む黄褐色シルトで構築されている。奥壁手前は浅い皿状のピットを呈しており、焼土・炭化物が多量に堆積している。煙道は長さ約1.6mで、先端に向かってやや下向きに傾斜しており、先端部には煙出しピット（径約40cm、深さ約30cm）がある。カマド内堆積土は１層、煙道内堆積土は５層ある。

［周溝］カマド付近を除いた北辺から西辺にかけて認められた。幅25～30cm、深さ20cmである。断面形はＵ字状を基調としているが、西辺では壁面を５cmほど奥に抉り込んでいる。堆積土は、１層が褐色砂質シルトを主体とした自然堆積土、２層がにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とした人為的埋



番号	種　別	層　位	特　　徴	写真図版	登録
1	土師器　坏	ＳＩ24住居跡堆積土	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　底：回転糸切り　内：ヘラミガキ→黒色処理　底径6.0cm。マメツ著しい。	5-4	22
2	須恵器　坏	ＳＩ24住居跡堆積土	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ　口径13.8cm　底径7.0cm　器高6.0cm	5-6	20
3	須恵器　甕	ＳＩ24住居跡堆積土	外：平行タタキ→ロクロナデ（沈線）内：あて具痕（同心円文）	5-7	98
4	須恵器　甕	ＳＩ24住居跡堆積土	外：平行タタキ→手持ちヘラケズリ　内：ナデ　底径14.0cm	5-8	23

第８図　ＳＩ24竪穴住居跡出土遺物

土である。

［その他］カマド付近の掘り方埋土下で、長さ約130cm、幅約30cmの小溝を確認した。

［堆積土］住居内堆積土は１層あり、自然堆積土である。

［出土遺物］住居内堆積土から、土師器坏（第８図１）・甕や須恵器坏（第８図２）・甕（第８図３・４）など少量出土している。いずれもロクロ調整で、坏は土師器・須恵器ともに回転糸切り後底部周辺に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

３　中・近世

(1) 発見された遺構

中・近世の遺構は、調査区全体に分布している。検出した遺構は掘立柱建物跡、水濠跡、溝跡（溝状遺構）、井戸跡、土坑、整地層などである。

以下、区の特徴と主要な遺構の説明を行い、その他については一覧表を作成した。

Ｓ区西

現地表面から70～120cmは耕作土や盛土（基本層序Ⅰ・Ⅱ層）で、丘陵裾ほど厚く堆積していた。遺構確認面は、基本層序Ⅲ層（整地層上面）及びⅦ層（地山面）である。

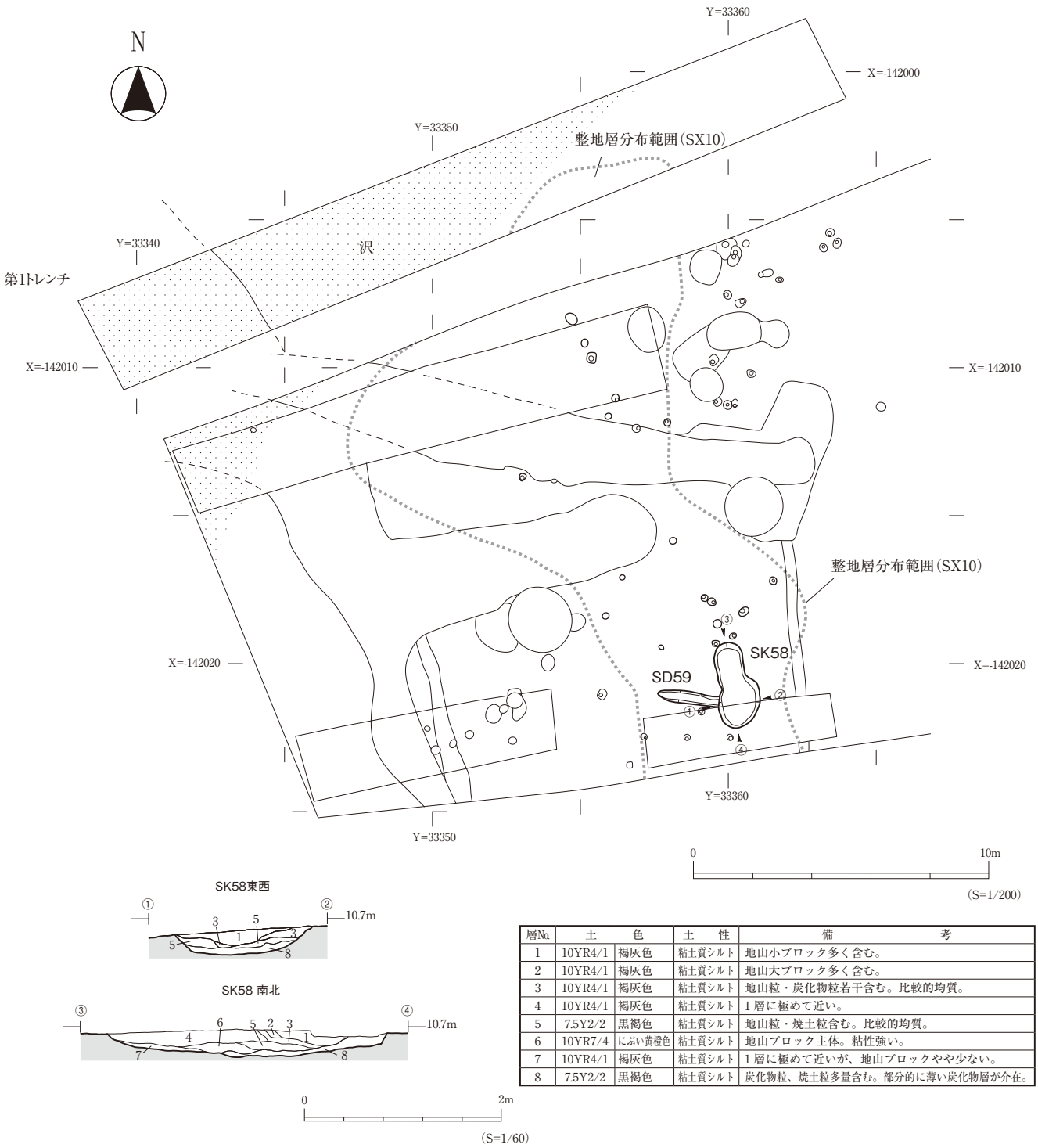
検出遺構は水濠跡１条、溝跡７条、井戸跡３基、土坑４基、整地層１ヶ所である。これらは整地層上面で確認したものが多く、整地層下の地山面では土坑１基、溝跡１条、少数の柱穴を確認したにすぎない。なお、整地層が残存していない部分で確認した遺構は、整地層との関係は不明であるが平面形や堆積土の特徴から中・近世の遺構と判断した。土坑の中には、SK21・58土坑のように底面付近に焼土ブロックや炭化物が堆積しているものがあった。周辺で鉄滓が見つかっていることもあり、これらは焼成遺構の可能性が考えられるが、壁面や底面に被熱は見受けられないことから、ここでは土坑として捉えておく。

＜整地層下面＞

【SK58土坑】南側に位置する。SD59溝跡より新しい。平面形は中央部分がくびれた不整楕円形状を呈する。長軸約2.9m、短軸1.0～1.4m、深さ15～25cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は、１～８層が地山ブロックを含む褐灰色粘土質シルト、９層が炭化物や焼土ブロックを多量に含む黒褐色粘土質シルトを主体とする人為的埋土である。９層には部分的に炭化物の薄層もみられる。壁面や底面に被熱は見受けられない。遺物は出土していない。

＜整地層上面＞

【SX10整地層】ほぼ中央で東西約11m、南北約16mの範囲に認められた。整地層下で旧表土が認められなかったことから、丘陵斜面を削平して整地したものと考えられる。整地層は調査区北側の沢の落ち込みと南側の地山の削り出し部分を覆っている。整地層の厚さは10～50cmで、旧地形が沢に向かって緩やかに傾斜しているため、上面が水平になるように沢地部分ほど厚く積んでいる。整地層は旧表土や地山ブロックが斑状に混じり合うもので、削り出した土を低い沢部分へ積んだものと思われる。整地層は、北側は隣接する第１トレンチまで広がっており、南側もさらに調査区外に及んでいる。



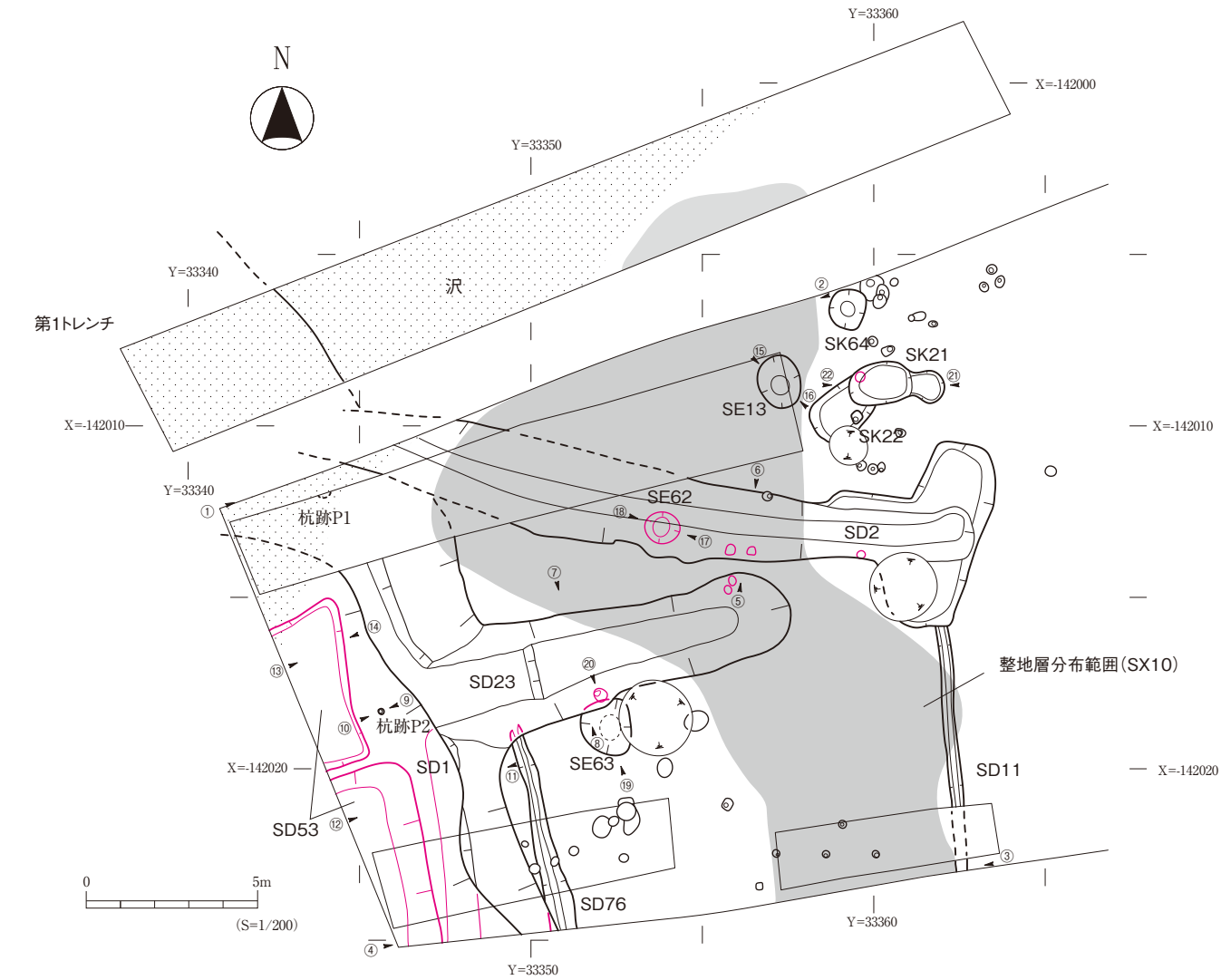
層No.	土　色		土　性	備　考
1	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。
2	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	地山大ブロック多く含む。
3	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	地山粒・炭化物粒若干含む。比較的均質。
4	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	1層に極めて近い。
5	7.5Y2/2	黒褐色	粘土質シルト	地山粒・焼土粒含む。比較的均質。
6	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土質シルト	地山ブロック主体。粘性強い。
7	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	1層に極めて近いが、地山ブロックやや少ない。
8	7.5Y2/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒多量含む。部分的に薄い炭化物層が介在。

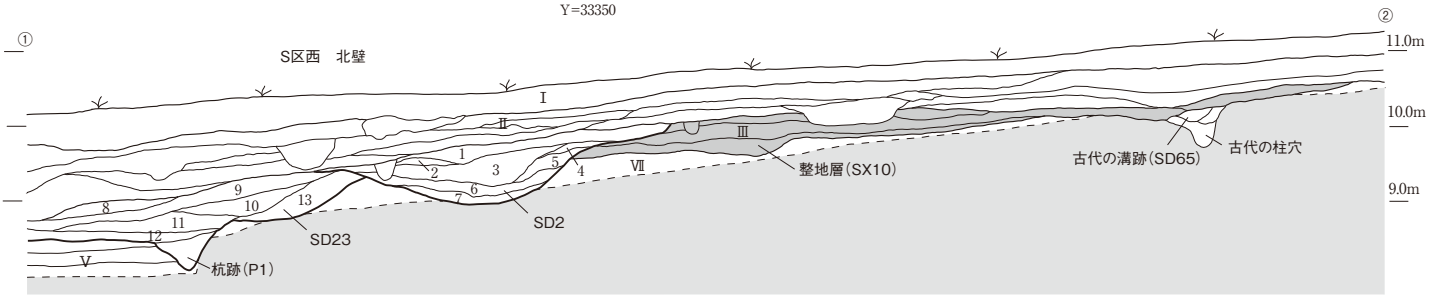
第９図　Ｓ区西中・近世遺構平面図・断面図（整地層下面）

なお、整地層は土質の違いにより３層に細別できたことから、これらの分布や重なりに留意しながら層位的な掘り下げを行ったが、それぞれの面で遺構は検出されなかった。

整地層からは、土師器・須恵器が出土している。

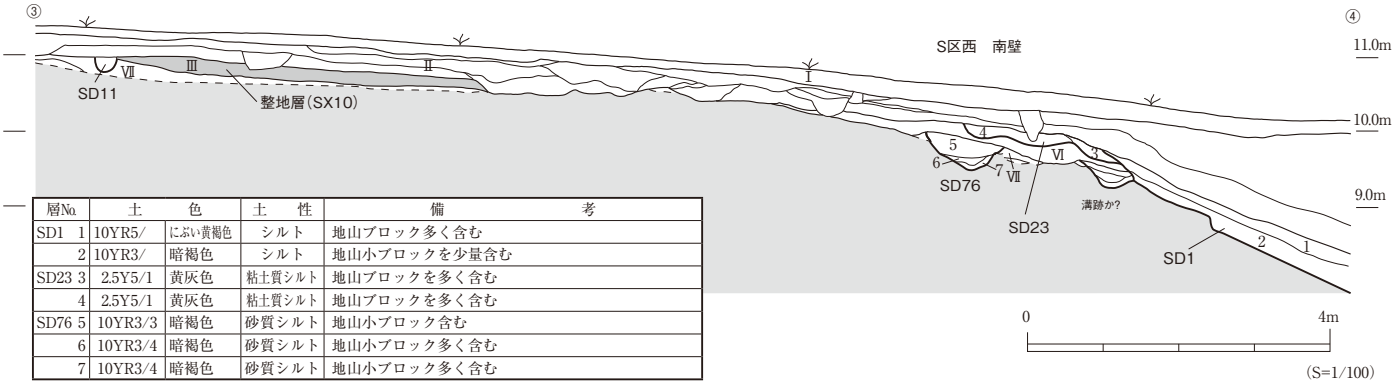
【SD１水濠跡】西端に位置する南北方向に延びる水濠跡である。調査区北壁の断面観察では、当水濠跡の延びを確認することができなかったことから、現存する水濠と同様に「¬」状を呈し、西へ方





層No.	土色		土性	備考
SD2 1	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒・小礫含む。しまりあり。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック含む。粘性やや強い。肉眼的に茶色味強い。
3	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	1に比べて黒色味やや増す。
4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒少量含む。
5	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。肉眼的に茶色味強い。
6	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。肉眼的に灰色味強い。粘性強い。

層No.	土色		土性	備考
SD2 7	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒若干含む。白色粘土層（厚1～2㎝）介在。
SD2 38	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	地山ブロック・炭化物粒少量含む。
9	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	1に比べてやや明るい。
10	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	
11	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	地山粒・炭化物粒少量含む。
12	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	地山粒若干含む。比較的均質.
13	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	地山ブロック・焼土粒・炭化物粒やや多く含む。植物遺体含む。



層No.	土色		土性	備考
SD1 1	10YR5/	にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む
2	10YR3/	暗褐色	シルト	地山小ブロックを少量含む
SD23 3	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む
4	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む
SD76 5	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山小ブロック含む
6	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	地山小ブロック多く含む
7	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	地山小ブロック多く含む

第10図　S区西　中・近世遺構平面図・断面図（整地層上面）

向を変えて延びていくものと考えられる。SD23溝跡、SX53溝状遺構と重複し、これらより新しい。水濠跡の西半部は調査区外に及んでいるが、現況で上幅約3.8m、深さ約1.3mである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は４層に細別され、灰黄褐色～暗オリーブ灰色粘土質シルトを主体とする比較的均質な自然堆積土である。

金装板碑（第16図38・39)、茶臼（第15図34･35･36)、瓦質土器の火鉢（第15図25)、砥石（第15図32･33)、五輪塔（第15図37)、古銭（写真図版6-27)、鉄滓、土師器・須恵器などが出土している。

【SD２溝跡】北側に位置し、丘陵上部から裾部へ延びる東西方向の溝跡である。SD11・23溝跡、SE62井戸跡と重複し、これらより新しい。上幅1.7～2.3m、下幅約50cm、深さは50～65cmである。断面形は逆台形を呈する。東端には、隅丸方形を呈する土坑状の窪みがあり、溝跡と接続して東端はＴ字状を呈する。窪みは長さ約5.5m､深さ30～40cmで､溝跡より浅い。堆積土は、１～４層が地山ブロックを多量に含む灰黄褐色粘土質シルトを主体とした人為的埋土、５～９層が褐灰色～灰オリーブ色粘土質シルトを主体とした自然堆積土である。なお、西側の沢近くでは上層の人為的埋土が薄くなり、大部分が自然堆積土であった。

陶器甕、古銭（写真図版６-28)、鉄滓、土師器・須恵器などが出土している。

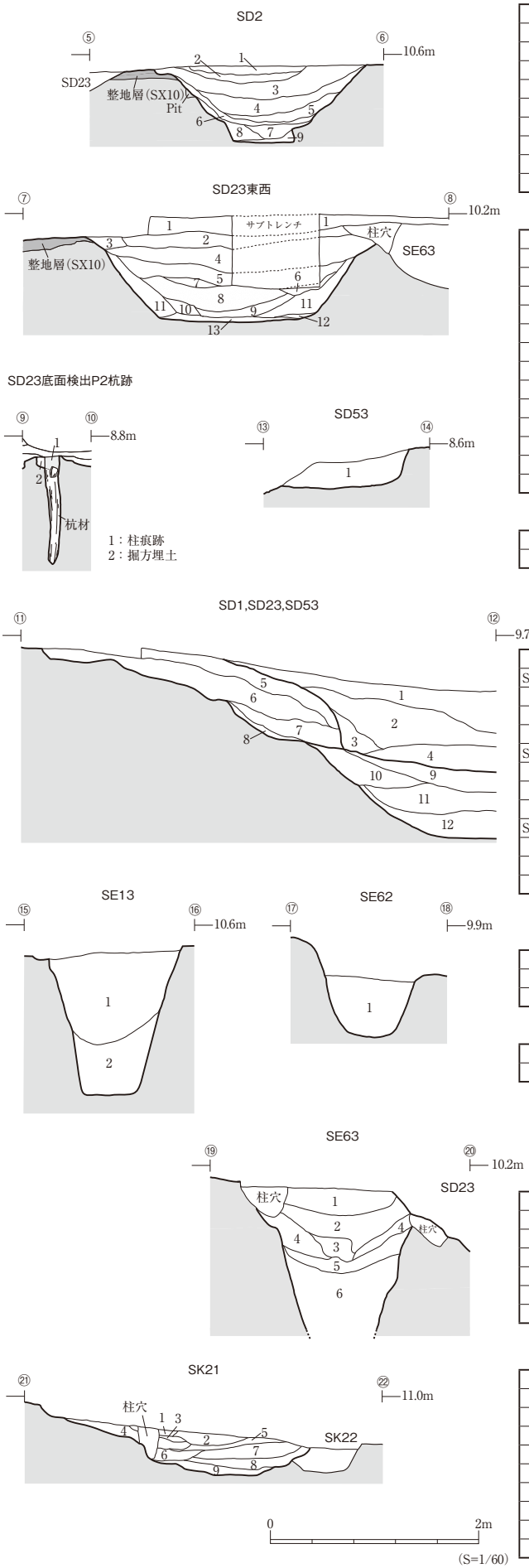
【SD23溝跡】西側に位置し、丘陵上部から裾部へ延びる東西溝と丘陵裾部に沿って延びる南北溝が接続するＴ字状の溝跡である。SD１水濠跡、SD２溝跡より古く、SD76溝跡、SE63井戸跡、SX53溝状遺構より新しい。

東西溝は上幅2.3～3.0m、下幅0.9～1.7m、深さは80～110cmである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。南北溝との接続部分近くには底面に約20cmの段差があり、西側が一段低くなる。堆積土は大別で4層（①～④）に、細別で13層に分けることができる。①層（１～5層）は、灰黄褐色～暗褐色シルトなどを主体とした自然堆積土である。②層（6～7層）は水成堆積で、部分的に未分解の植物遺体を含む。③層（8層）は、地山ブロックを多量に含む黄灰色粘土質シルトの人為的埋土である。④層（9～13層）は、黒褐色粘土質シルト～粘土の自然堆積土である。

南北溝は第１トレンチで確認した当溝跡の延びを合わせると、長さ20m近くになる。西半部はSD１水濠跡によって壊されているが、現況で上幅約5.2m、深さ60～80cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗灰黄褐色～黄灰色粘土質シルトを主体とする自然堆積土で、底面付近には未分解の植物遺体を含む。東西溝との接続部分と調査区北壁近くの2ヵ所で、杭跡（Ｐ１・２）を確認した。P1は、調査区北壁の断面観察で掘り方埋土のみを確認したもので、径約80cm、溝跡底面からの深さは約40cmである。Ｐ２は径約25cmの円形を呈し、掘り方の深さは約10cmである。柱痕跡は径約10cmの円形で、掘り方底面よりさらに下には、約90cmの杭材が残存していた。杭材を据えた後に打ち込んだものと考えられる。

常滑産や在地産の陶器甕・鉢（第14図16･17)、板碑（第16図40)、鉄滓、土師器・須恵器、縄文時代の磨製石斧（第５図３）などが出土している。

【SX53溝状遺構】西端に位置する。SD１水濠跡、SD23溝跡を掘り上げた後にその底面で確認した。中央部の高まりを境に北（ａ）と南（ｂ）に分かれるが、両者は方向を揃えて並んで検出されたこと



SD2

層No.	土色	土性	備考
1	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	人為的埋土。地山ブロック非常に多く含む。
2	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	〃 。地山ブロック・炭化物粒含む。
3	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	〃 。地山ブロック非常に多く含む。
4	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	〃 。地山小ブロック・炭化物を含む。
5	10YR2/1	黒色	シルト	自然堆積土。地山小ブロック含む。植物遺体を非常に多く含む。
6	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	〃 。地山ブロック部分的に含む。均質な層。
7	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	〃 。地山粒を斑状に含む。
8	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	〃 。地山小ブロック多く含む。
9	5Y6/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	〃 。地山小ブロック含む。

SD23　東西溝

層No.	土色	土性	備考
1	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	覆土。焼土粒・炭化物粒・地山小ブロック少量含む。
2	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	地山小ブロック多く含む、炭化物粒、地山粒含む。
3	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	地山小ブロック少量含む。
4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	地山小ブロック少量含む。炭化物、焼土粒含む。
5	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山小ブロック多く含む。炭化物、焼土粒含む。
6	10YR3/2	黒褐色	シルト	水成堆積。植物遺体・小礫を多く含む。
7	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	〃 。地山小ブロック含む。
8	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	人為的埋土。地山小ブロック非常に多く含む。
9	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	地山小ブロックわずかに含む。
10	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山小ブロック・細砂含む。
11	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山小ブロック非常に多く含む。
12	2.5Y5/4	黄褐色	粘土	地山小ブロック非常に多く含む。
13	7.5GY6/1	緑灰色	粘土	地山小ブロック含む。

SD53

層No.	土色	土性	備考
1	10Y5/1	灰色	粘土	比較的均質。炭化物粒を若干含む。

SD01・23・53

層No.	土色	土性	備考
SD1　1	18YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒・小礫含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒・小礫含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒・小礫・地山小ブロック含む。
4	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土質シルト	細砂含む。
SD23　5	10YR4/6	褐色	粘土	人為的埋土。地山ブロックを含む。SD23 東西溝 8 層に対応。
6	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	地山小ブロック、小礫含む。
7	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	地山粒・小ブロック多く含む。
8	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	
SD53　9	7.5Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	地山ブロック少量含む。
10	N4/1	灰色	粘土質シルト	地山ブロック・小礫・細砂含む。植物遺体含む。
11	N4/1	灰色	粘土	
12	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	地山小ブロック含む。

SE13

層No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2	黒褐色	シルト	人為的埋土。地山大ブロック多量に含む。
2	10YR5/1	緑灰色	粘土質シルト	自然堆積土。部分的に植物遺体を含む。

SE62

層No.	土色	土性	備考
1	N4/1	灰色	粘土質シルト	地山ブロックを含む。グライ化。

SE63

層No.	土色	土性	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	地山粒・炭化物粒少量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物粒多く含む。
3	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土	地山粒・炭化物粒含む。
4	5YR3/2	暗赤褐色	シルト	地山ブロックを多く含む。
5	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	壁側に地山ブロックを多く含む。
6	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロックと粗砂が互層になる。グライ化。

SK21

層No.	土色	土性	備考
1	2.5Y7/1	灰白色	シルト	焼土粒少量含む。
2	2.5Y6/1	黄灰色	シルト	地山大ブロック多量、焼土粒・炭水化物少量含む。
3	10Y4/1	灰色	粘土質シルト	地山小ブロック含む（下層部ほど多い）。
4	5Y5/1	灰色	粘土質シルト	焼土ブロック・地山ブロック多量含む。
5	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	焼土ブロック、炭化物を少量含む。
6	10YR3/1	黒褐色	シルト	地山ブロック中量、炭化物・焼土粒少量含む。
7	5Y7/2	灰白色	粘土質シルト	地山ブロックを斑状に多量含む。
8	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック・焼土ブロック少量含む。
9	5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	炭化物層。地山小ブロックを部分的に含む。

第11図　S区西　中・近世遺構断面図（整地層上面）

から、一連のものと考えられる。ａは西側が調査区外にあるが、平面形は方形状を基調としていると思われ、規模は南北4.4～4.7m、東西1.4～1.9m、深さ約20cmである。底面は平坦で壁は急角度に立ち上がる。ｂは北東部の一部を検出し、規模は南北約5.4m、東西1.3～2.1m、深さ約65cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、灰色～オリーブ黒色の粘土質シルトや粘土の自然堆積土である。遺物は出土していない。

【SD76溝跡】南側に位置する南北方向に直線的に延びる溝跡である。SD23溝跡より古い。上幅50～80cm、深さ15～30cmである。断面形はＵ字形を呈する。堆積土は、地山ブロックを含む暗褐色砂質シルトの自然堆積土である。

遺物は、常滑産の陶器甕（第14図12）が出土している。

【SE13井戸跡】北側に位置する素掘りの井戸跡である。平面形は楕円形で、長軸約1.5m、短軸約1.2m、深さは約1.4mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層で、１層が地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトの人為的埋土、2層が緑灰色粘土質シルトの比較的均質な自然堆積土である。遺物は出土していない。

【SE62井戸跡】中央に位置する素掘りの井戸跡である。SD２溝跡底面で確認したもので、SD２溝跡より古い。平面形は円形で、直径約1.0m、深さ60cmである。断面形はＵ字形を呈する。堆積土は1層で、地山ブロックを多量に含む灰色粘土質シルトの人為的埋土である。全体的にグライ化している。遺物は出土していない。

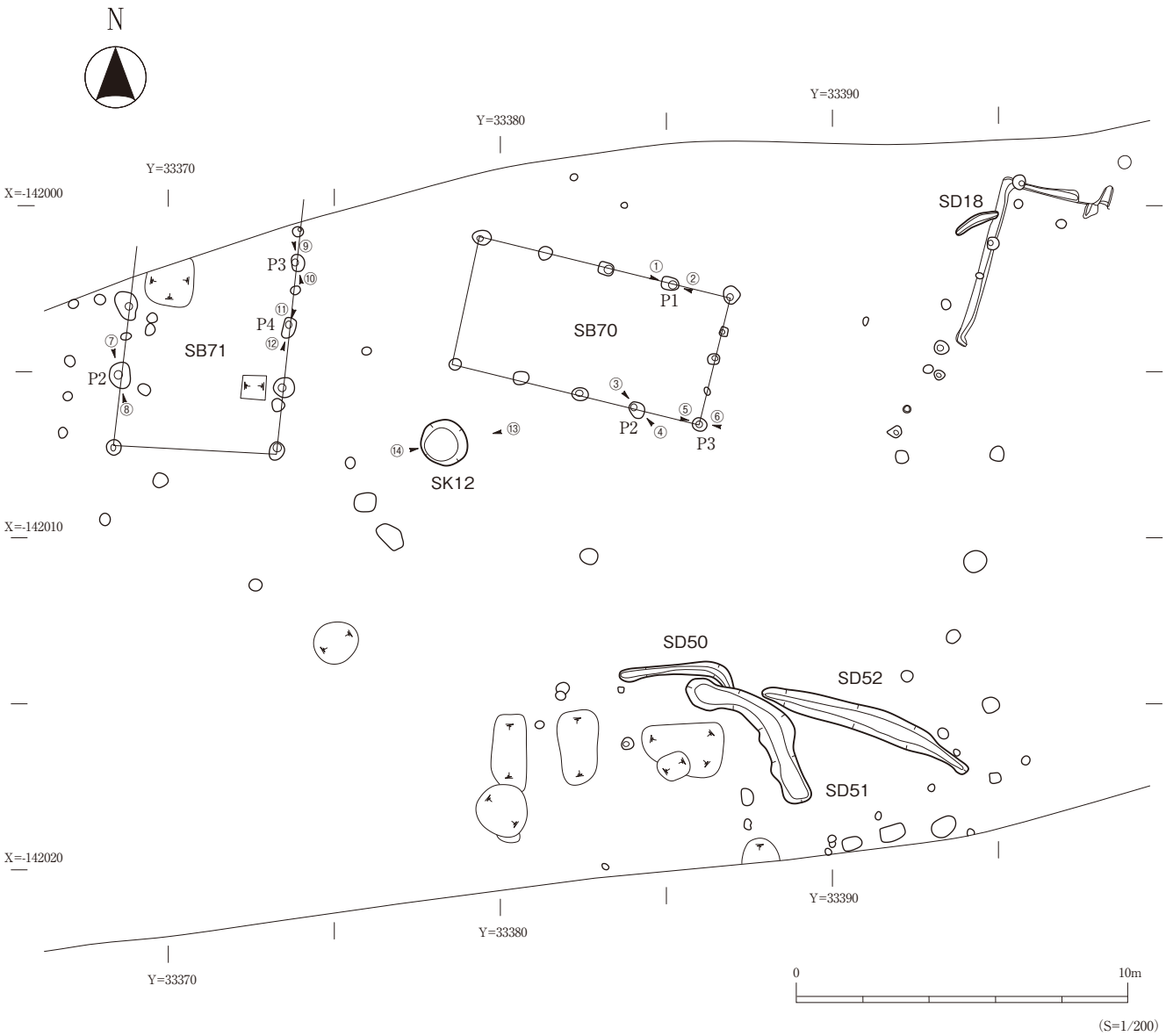
【SE63井戸跡】中央に位置する素掘りの井戸跡である。SD23溝跡より古い。平面形は円形で、直径約1.6m、深さは1.0m以上ある。断面形は漏斗状を呈する。堆積土は、１～５層が暗褐色～黒褐色粘土質シルト、６層がにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

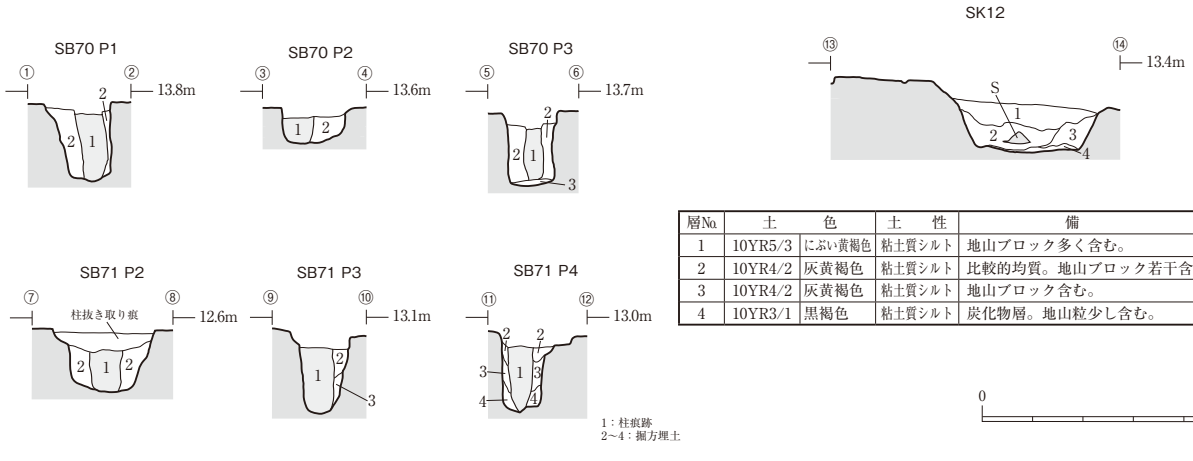
【SE21土坑】北側に位置する土坑である。ＳＫ22土坑より新しい。平面形はSK58土坑と同じ、中央部分がくびれた不整楕円形状を呈する。長軸約2.6m、短軸0.9～1.2m、深さは10～40cmである。断面形は、長軸方向でみると皿状を基本としており、くびれ部分で20cmほどの段差があり、西側が一段低くなる。堆積土は、炭化物や焼土ブロックを多く含む灰色～黒褐色シルトを主体とする人為的埋土である。底面近くには炭化物主体の黒色土が堆積していたが、壁面や底面に被熱は見受けられない。遺物は出土していない。

Ｓ区中央

後世の造成による削平を受けており、特に高まり部分は丘陵基盤の凝灰岩層（基本層序Ⅷ層）まで深く削られていた。遺構確認面は、表土下の基本層序Ⅶないしは Ⅷ層である。遺構は疎らで、頂部の平坦面で掘立柱建物跡２棟、土坑跡１基を確認した。頂部周辺の斜面では幅１m未満の浅い小溝や柱穴などを確認した。なお、北に隣接する確認トレンチ５～７では、溝跡２条を確認したのみである。

【SB70建物跡】桁行４間×梁行２間の東西棟である。建物総長は桁行約7.7m、梁行約3.9mである。柱間寸法は、ともに1.9～2.0mである。建物方向は北側柱列で、東で南へ約13°偏する。柱穴の平面形は、径35～60cmの円形もしくは長方形状を呈する。深さは30～50cmである。埋土は、地山ブロッ





層No.	土色		土性	備考
1	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	比較的均質。地山ブロック若干含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック含む。
4	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	炭化物層。地山粒少し含む。

第12図　S区中央　中・近世遺構平面図・断面図

クを含む黄褐色～黄灰色シルトを主体とする。11個の柱穴のうち8個の柱穴で、径15～20cmの円形の柱痕跡を確認した。

【SB71建物跡】桁行４間以上×梁行１間の南北棟である。建物総長は桁行6.7m以上、梁行約4.9m、柱間寸法は約1.9～2.0mである。建物方向は東側柱列で、北で東へ８°偏する。柱穴の平面形は、径40～90cmの円形もしくは不整楕円形を呈する。深さは40～65cmである。埋土は地山ブロックを含む明黄褐色～黄褐色シルトを主体とする。７個の柱穴を検出し、すべてで径20～30cmの円形の柱痕跡を確認した。また、一部には柱抜き取り痕がみられる。

【SK12土坑】平面形は円形で、直径約1.4m、深さ約55cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は４層に細分でき、灰黄褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

Ｓ区東

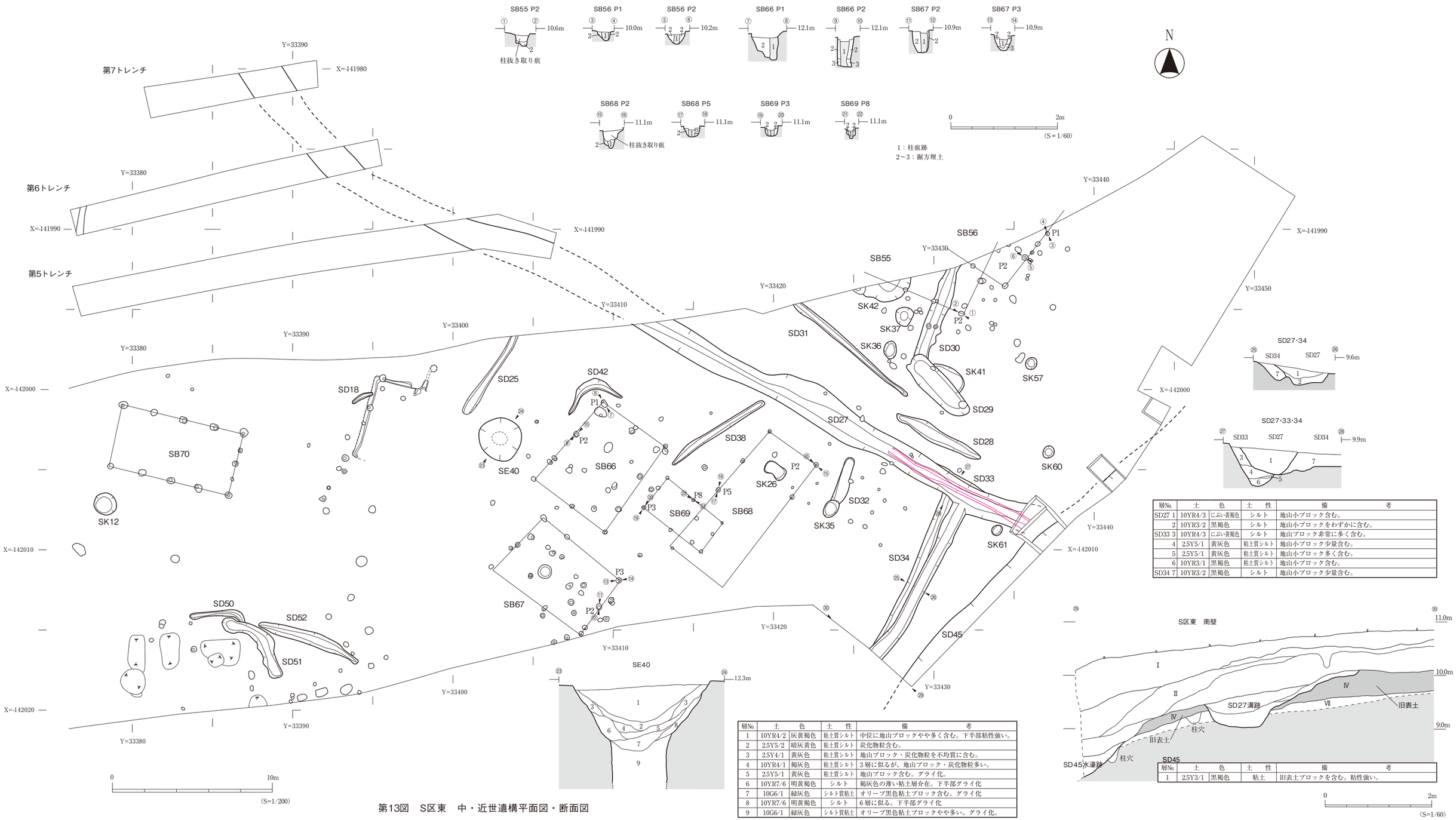
この区域には旧表土（基本層序Ⅳ層）が残っており、その上面は平坦であった。旧表土の層厚は20～50cmで、旧地形が丘陵裾に向かい緩やかに傾斜しているため、丘陵裾ほど厚く堆積している。柱穴は旧表土から掘り込まれていたが旧表土上面での検出は難しく、確認できたのがその下の基本層序Ⅶ層であったため、丘陵裾部の柱穴については十分に把握することはできなかった。遺構は、調査区北東隅部分を除いてほぼ全域に分布している。

検出遺構は掘立柱建物跡６棟、水濠跡１条、溝跡10条、井戸跡１基、土坑９基である。

【SB55・56建物跡】直交する２条の柱列跡から建物跡の一部と推定した。東西・南北ともに２ないし３間以上の建物でいずれも北側は調査区外へ延びる。SD55建物跡は、SD30溝跡、SK44土坑と重複し、これらより新しい。また、SB55・56建物跡は重複する位置にあるが、直接の切り合いはない。柱穴の平面形は径25～40cmの円形を呈し、深さは15～20cmである。埋土は地山ブロックを含む暗灰黄褐色粘土質シルトを主体とする。一部には径10cmの円形の柱痕跡、柱抜き取り痕が認められる。

【SB66建物跡】西側に位置する桁行３間×梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行約6.4m、梁行約4.7m、柱間寸法は桁行1.8～2.3m、梁行2.3～2.5mである。建物方向は西側柱列で、北で東へ36°偏する。柱穴の平面形は、径30～50cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは10～25cmである。埋土は、地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトを主体とする。10個の柱穴のうち９個の柱穴で、径10～30cmの円形の柱痕跡を確認した。

【SB67建物跡】南西寄りに位置する桁行３間×梁行２間の東西棟である。建物総長は桁行約6.2m、梁行約4.3m、柱間寸法は桁行約1.9m、梁行約2.1mである。建物方向は北側柱列で、東で南へ37°偏する。柱穴の平面形は径30～45cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは25～50cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトを主体とする。７個の柱穴のうち4個の柱穴で、径約15cmの円形の柱痕跡を確認した。



層No	土色	土性	備考
SD27 1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	地山小ブロック含む。
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	地山小ブロックをわずかに含む。
SD33 3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む。
4	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	地山小ブロック少量含む。
5	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	地山小ブロック多く含む。
6	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	地山小ブロック含む。
SD34 7	10YR3/2	黒褐色	シルト	地山小ブロック少量含む。

層No	土色	土性	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中位に地山ブロックやや多く含む。下半部粘性強い。
2	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土質シルト	炭化物粒含む。
3	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物粒を不均質に含む。
4	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	3層に似るが、地山ブロック・炭化物粒多い。
5	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	地山ブロック含む。グライ化。
6	10YR7/6	明黄褐色	シルト	褐灰色の薄い粘土層介在。下半部グライ化
7	10G6/1	緑灰色	シルト質粘土	オリーブ黒色粘土ブロック含む。グライ化
8	10YR7/6	明黄褐色	シルト	6層に似る。下半部グライ化
9	10G6/1	緑灰色	シルト質粘土	オリーブ黒色粘土ブロックやや多い。グライ化。

層No	土色	土性	備考
1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	旧表土ブロックを含む。粘性強い。

第13図　S区東　中・近世遺構平面図・断面図

【SB68建物跡】ほぼ中央に位置する桁行４間×梁行１間の南北棟である。SB69建物跡とは重複する位置にあるが、柱穴の切り合いはなく新旧関係は不明である。建物総長は桁行約9.5m、梁行約3.6m、柱間寸法は2.3～2.5mである。建物方向は西側柱列で、北で東へ39°偏する。柱穴の平面形は径20～30cmの円形を呈し、深さは10～25cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトを主体とする。７個の柱穴のうち４個の柱穴で、径約10cmの円形の柱痕跡を確認した。

【SB69建物跡】ほぼ中央に位置する桁行２間×梁行１間の東西棟である。SB68建物跡とは重複する位置にあるが、柱穴の切り合いはなく新旧関係は不明である。建物総長は桁行約4.5m、梁行約2.3m、柱間寸法は2.1～2.3mである。建物方向は北側柱列で、東で南へ39°偏する。柱穴の平面形は径20～25cmの円形を呈し、深さは10～20cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトを主体とする。６個の柱穴のうち5個の柱穴で、径約10cmの円形の柱痕跡を確認した。

【SD45水濠跡】東端に位置する南西－北東方向に延びる水濠跡である。水濠跡の西辺の一部を検出したのみであるが、現況で上幅1.3m、深さ70cmである。SD27・33溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。壁はやや角度を持って立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質シルト～粘土の自然堆積土で、下層ほど粘性が強まりグライ化している。

切込焼と思われる染付磁器碗（第14図４）、須恵器甕、縄文土器（第５図１）などが出土している。

【SD27溝跡】中央に位置する溝跡で、丘陵尾根上から裾部へ延びる東西溝と、SD45水濠跡のすぐ西に位置する南北溝がT字状に接続するものである。SD33・34溝跡より新しい。当溝跡はさらに東に延びてSD45水濠跡と重複すると考えられるが、削平が及んでいるため不明である。

東西溝は検出長約27mで、第５・６・７トレンチで確認した延びを合わせると、約56mになる。ほぼ直線的に延び、第６・７トレンチ部分で北寄りに方向を変える。上幅1.2～2.3m、下幅60～85cm、深さは45～70cmであり、多少の広狭がある。断面形は逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトを主体とする自然堆積土で、非常にしまりがある。

南北溝は上幅0.8～1.1m、下幅50～70cm、深さは15～30cmで、東西溝に比べて規模が小さい。断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色砂質シルトを主体とする自然堆積土である。東西溝と南北溝の接続部分には、底面に約15cmの緩やかな段差が付き、東西溝が一段低くなる。

常滑産陶器甕（第14図14）や在地産陶器鉢（第15図21）、板碑（第17図41）、鉄滓のほか、土師器・須恵器などが出土している。

【SD33溝跡】SD27東西溝とほぼ重複し、これより古く、SD27東西・南北溝の接続部分で北辺の一部を確認したのみで、大部分はSD27溝跡掘り下げ後、その底面で確認した。底面で検出した溝跡は幅25～40cm、深さ約20cmである。推定される規模は上幅約1.0m、下幅20～30cm、深さ約80cmであり、SD27溝跡に比べて約20cm深い。堆積土は、地山ブロックを多く含む黄灰色～黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

在地産の陶器甕（第15図22）が出土している。

【SD34溝跡】東側に位置する南北方向の溝跡である。SD27南北溝と重複し、これより古い。当溝跡の東側はSD27溝跡によって壊されているが、現況で上幅70～80cm、下幅15～40cm、深さ約25cmで

ある。断面形は幅広のＵ字形で、底面付近はやや凸凹がある。堆積土は、黒褐色シルトを主体とする比較的均質な自然堆積土である。遺物は出土していない。

【SE40井戸跡】西側に位置する素掘りの井戸跡である。平面形は円形で、直径約2.6m、深さは1.9m以上ある。断面形は漏斗状を呈する。堆積土は、１～８層が暗灰黄色～黄灰色粘土質のシルトや粘土質シルト、９層が緑灰色のシルト質粘土である。いずれも自然堆積土である。

中国産の染付磁器碗（第14図２）が出土している。

Ｎ区

南のＳ区中央へ続く丘陵尾根部分とその西の沢部分である。沢部分に東西および南北方向の６本のトレンチ（第１～４・８～９トレンチ）、丘陵尾根部分に東西方向の３本のトレンチ（第５～７トレンチ）を設定した。Ｓ区同様後世の造成によって丘陵尾根付近は削平を受け、沢部分は厚く土盛りされていた。また、第１～４・８～９トレンチでは沢の堆積土を検出し、第８トレンチ北側を沢頭とする南西に開く沢であることを確認した。

沢部分のトレンチでは、第１トレンチと第２～３トレンチの２ヵ所で整地層を確認した。前者はＳ区西のSX10整地層の延びと考えられる。後者は、第２～３トレンチにかけて東西約19m、南北約8mの範囲に認められたもので、沢の堆積土を覆っている。層厚は25～40cmである。整地層は旧表土や地山ブロックを主体とするもので、場所によっては地山ブロックが層状（厚さ５～20cm）に堆積している。SX10整地層は北へ延びず、両者は平面的につながらないが、同じ沢部分に盛土整地を行なっていることから、一連のものであった可能性が高い。遺構は第２～３トレンチに集中しており、整地層の分布範囲と重なる。検出遺構は井戸跡1基、炭窯跡1基、柱穴群である。第４・８～９トレンチでは遺構は確認されていない。

丘陵尾根部分のトレンチでは、第５～７トレンチでSD27溝跡の延びを確認した。

第１トレンチで曲物蓋（第15図26）、砥石（第15図31）、第２トレンチで須恵器系の陶器壺（第14図９）、常滑産陶器鉢（第14図15）や在地産陶器甕（第14図18）、縄文時代の石匙（第５図２）、第４トレンチで相馬産の陶器碗（第14図７７）などが出土している。このほか土師器・須恵器が数点ある。

遺構種類	遺構№	地区	特徴	備考	出土遺物
溝跡	SD11	Ｓ区西	南北方向。検出長 7.2m、幅 35cm、深さ 15cm。		
	SD59	Ｓ区西	東西方向。幅 40cm、深さ 15cm。断面皿状。	整地層下面 SK58 土坑より古。	
	SD18	Ｓ区中央	東西方向。幅 20cm。深さ 15cm。断面逆台形。		
	SD25	Ｓ区中央	南西 - 北東方向。幅 45 ～ 60cm、深さ 10cm。断面皿状。		近世の肥前産染付磁器碗
	SD50	Ｓ区中央	弧状。幅 20 ～ 40cm、深さ 20cm。断面皿状。	SD51 溝跡より古。	
	SD51	Ｓ区中央	弧状。幅 60 ～ 110cm、深さ 10cm。断面皿状。	SD20 溝跡より新。	
	SD52	Ｓ区中央	東西方向。幅 40 ～ 80cm、深さ 10 ～ 15cm。断面逆台形。		
	SD28	Ｓ区東	北西 - 南東方向。幅 50 ～ 90cm、深さ 10cm。断面箱形。		
	SD29	Ｓ区東	北西 - 南東方向。幅 120 ～ 150cm、深さ 15cm。断面逆台形。	SD30 溝跡・SK41 土坑より新。	常滑産甕
	SD30	Ｓ区東	南北方向。幅 90 ～ 110cm、深さ 30cm。断面皿状。	SD29 溝跡より古。	
	SD31	Ｓ区東	北西 - 南東方向。幅 30 ～ 50cm、深さ 10 ～ 25cm。断面 U 字形。		
	SD32	Ｓ区東	南北方向。幅 60 ～ 80cm、深さ 10cm。断面箱形。	SK35 土坑より古。	
	SD38	Ｓ区東	南西 - 北東方向。幅 40cm、深さ 10cm。断面皿状。		
	SD42	Ｓ区東	弧状。幅 20 ～ 65cm、深さ 10cm。断面皿状。	雨落ち溝か。	
土坑	SK22	Ｓ区西	楕円形状。長軸 170cm、短軸 130cm、深さ 35cm。断面皿状。	SK21 土坑より古。	
	SK64	Ｓ区西	円形状。径 110cm、深さ 50cm。断面不整 U 字形。下部は人為堆積土。		
	SK26	Ｓ区東	不整方形状。長軸 130cm、短軸 65cm、深さ 10cm。断面皿状。	鉄滓を多く含む。	
	SK35	Ｓ区東	楕円形状。長軸 120cm、短軸 80cm、深さ 15cm。断面皿状。	SD32 溝跡より新。	
	SK36	Ｓ区東	楕円形状。長軸 110cm、短軸 75cm、深さ 15cm。断面皿状。		
	SK37	Ｓ区東	円形状。径 130cm、深さ 35cm。断面皿状。		

土坑	SK41	S区東	楕円形状。長軸 230cm。深さ 20cm。断面皿状。	SD29 溝跡より古。	
	SK44	S区東	楕円形か。長軸 310cm 以上。深さ 60cm。断面皿状。	SB55 建物跡より古。	
	SK57	S区東	円形。径 80cm、深さ 35cm。断面不整 U 字形。		
	SK60	S区東	円形状。径 70cm、深さ 40cm。断面箱形。		
	SK61	S区東	円形状。径 70cm、深さ 10cm。断面箱形。		

その他の中・近世遺構一覧表

(2) 発見された遺物

陶磁器類、木製品、金属製品、土製品、石製品、古銭などがある。各遺構の堆積土や表土から出土したもので、それぞれ散発的な出土状況である。

陶磁器類

【磁器】１は青磁の香炉である。全体的に厚みがあり、オリーブ灰色系の釉薬がかかり高台内は釉が掻き取られ露胎となる。外面に劃花文を施している。中国（明代）の製品である。２は見込みに十字花文を施した染付碗で、15世紀後半～16世紀の中国（明代）の製品である。３は肥前産の碗で、見込みには五弁花文が施されている。近世期のものである。４は県内切込窯の製品の可能性がある。5は瀬戸・美濃産の碗蓋である。

【陶器】施釉陶器：６は瀬戸・美濃産の碗で、淡黄色を呈する透明な灰釉を施釉しており、貫入が著しい。外面下端が露胎しており、回転ヘラケズリ調整がみられる。７は大堀相馬産の碗、８は産地不明の土瓶蓋である。

無釉陶器：９は壺肩部の小破片で、外面に波状の平行沈線が３本櫛描きされている。内面にはロクロ調整がみられる。12～13世紀の須恵器系のものである。11～15は常滑産の甕・鉢である。このうち13には平行状の押印、14には漆継ぎが認められる。また、15の高台付き鉢の底部破片には、外面の高台付近に手持ちヘラケズリの調整がみられる。内面は磨耗痕がみられる。16～23は在地産の甕・鉢である。

【土師質土器】24は手づくねかわらけである。底部は平底風の丸底で、体部から口縁部にかけて弱く屈曲し短く立ち上がる。体部から底部外面には指オサエの痕跡が残り、口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。内外面の一部に煤が付着しており、灯明皿に使用されたものと思われる。

【瓦質土器】25は火鉢で、型押しの雷門が施されている。15～16世紀の製品である。

木製品

26は樺皮結合の円形曲げ物である。皮帯が残存している。曲物の中心部には補修のための綴じ穴が２ヵ所認められる。

金属製品

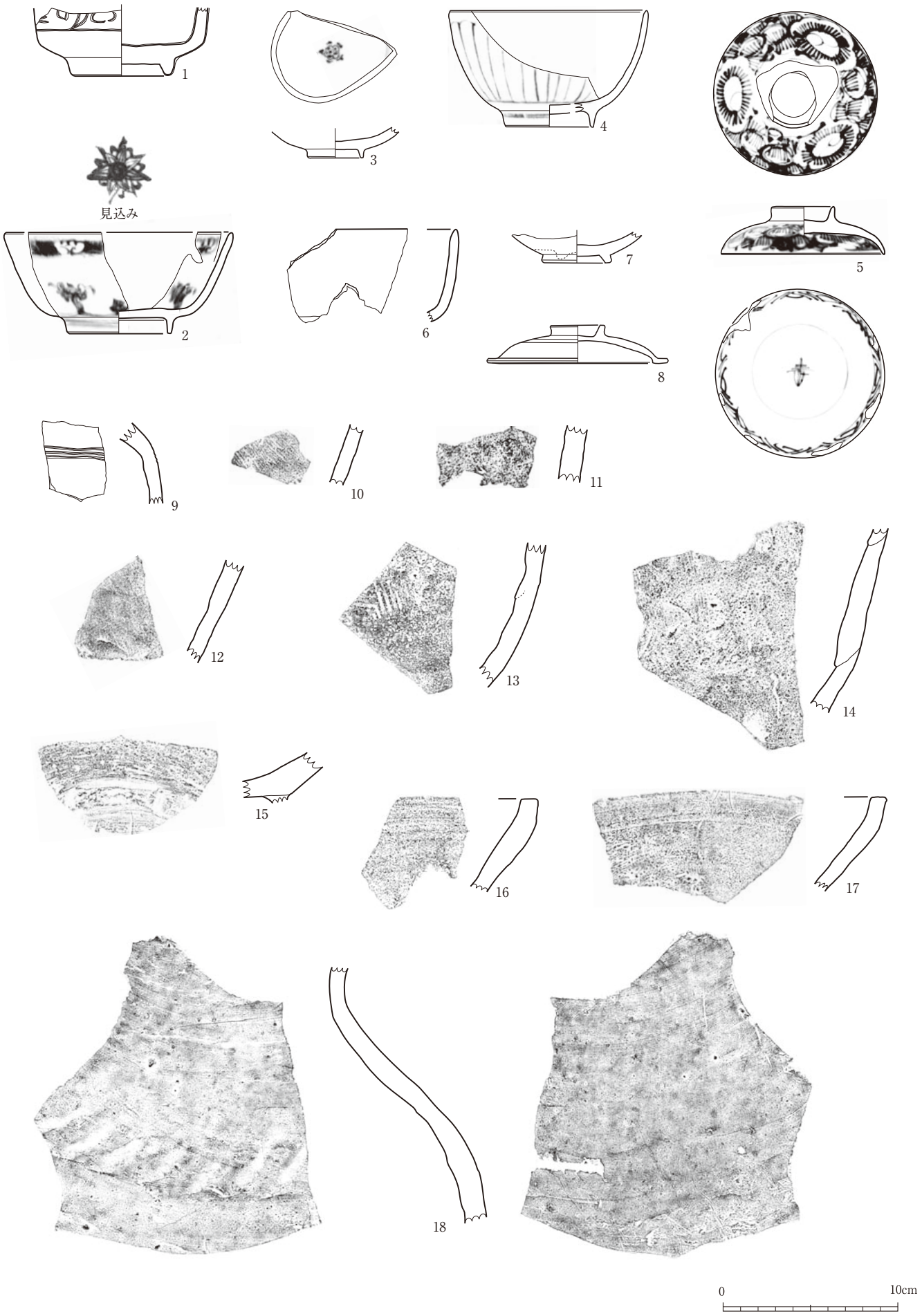
27・28は煙管雁首と吸口である。29は鉄釘である。

土製品

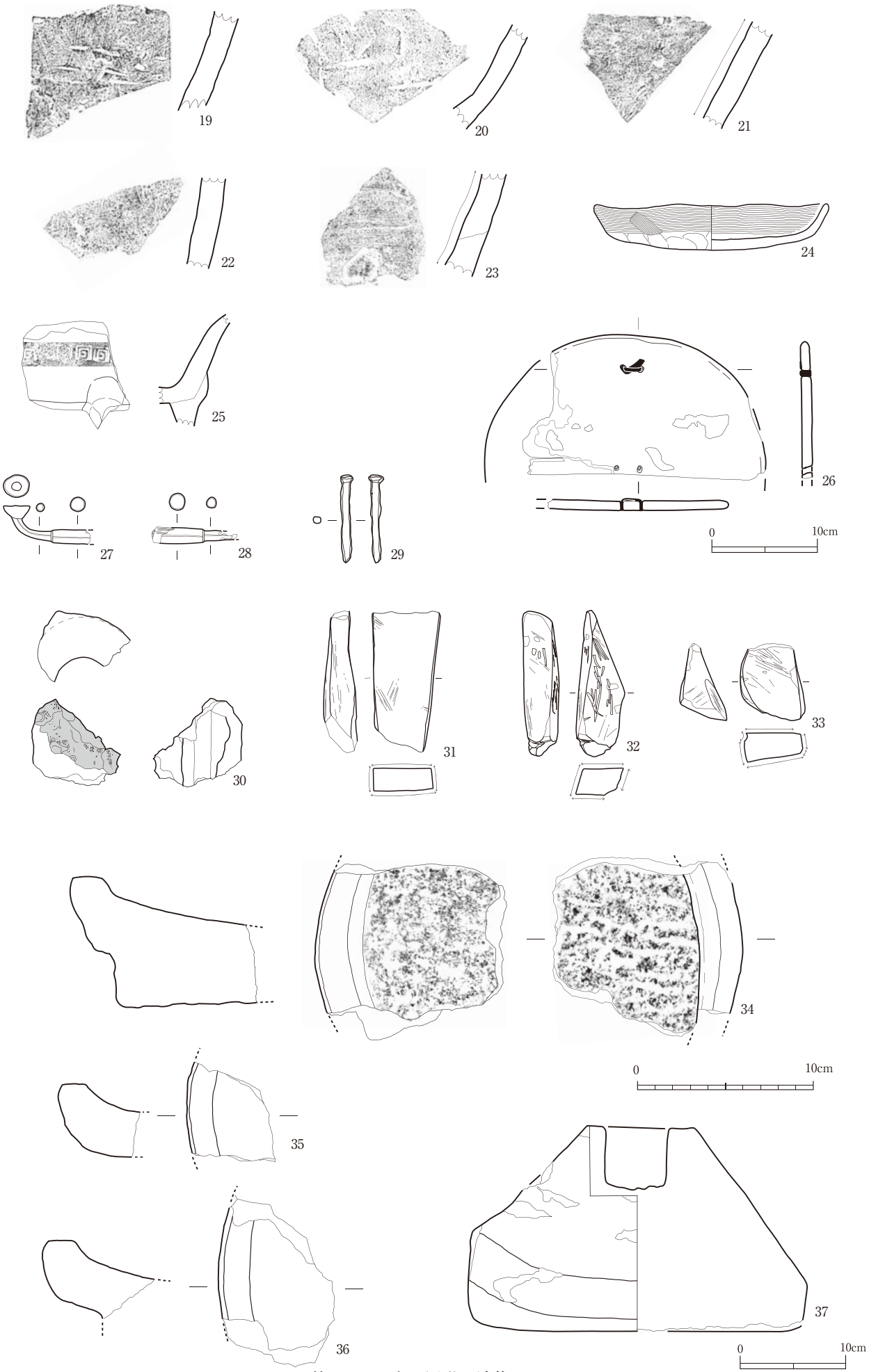
30はフイゴの羽口である。先端部には溶けた鉄や灰が多量に付着している。

石製品

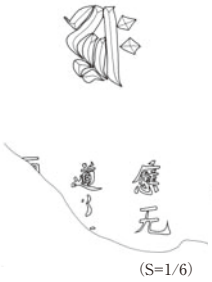
【砥石】31・32は凝灰岩製、33は頁岩製である。両面・側面に使用面がある。32・33には溝状の凹みがみられる。



第 14 図　中・近世の遺物　1



第 15 図　中・近世の遺物　2



(S=1/6)

38

(S=1/8)

(種子)キリーク

應无

道□

而カ

(S=1/6)

(種子)バン

本地發カ心

清祐カ禪カ門

法界大日

六月廿カ九カ

39

(S=1/8)

(S=1/6)

於我滅度後

應受持斯経

(種子)

未解読

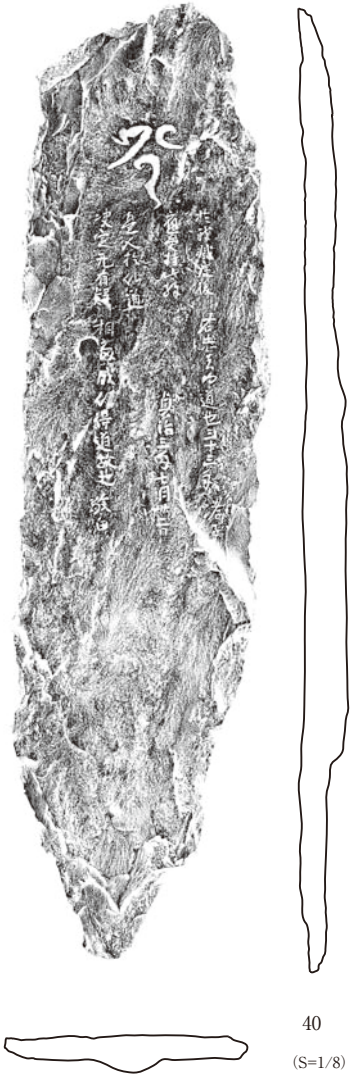
是人於仏道

決定无有疑カ

右志者為道也三十三年 孝子

貞治三年七月廿二日

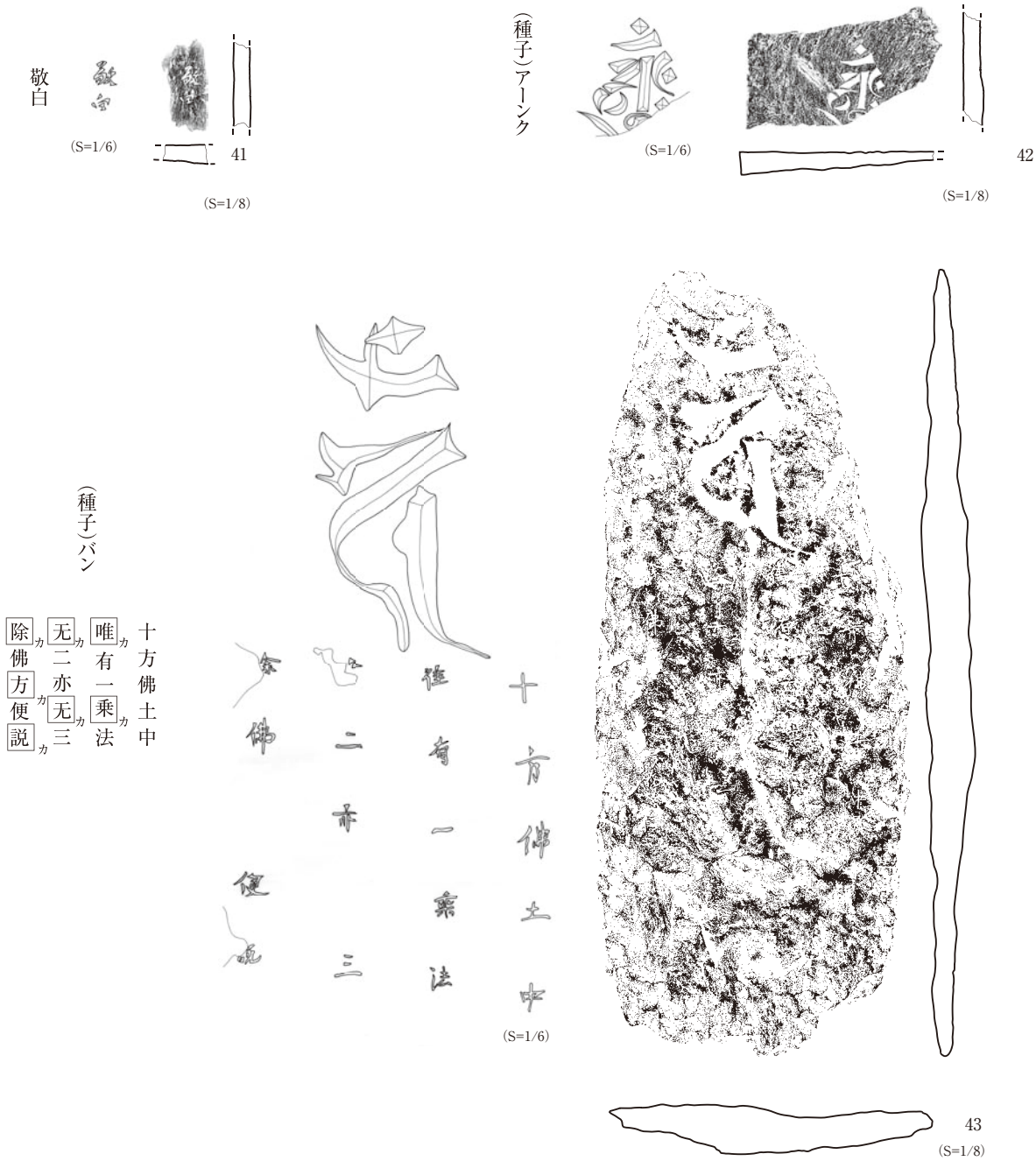
相當成仏得道故也 敬白



40

(S=1/8)

第 16 図　中・近世の遺物　3



第 17 図　中・近世の遺物　4

【茶臼】34は下臼～受皿部、35・36は受皿部のみである。石材はすべて安山岩製である。

【五輪塔】37は火輪である。安山岩製である。

【板碑】38～43は、すべて粘板岩製である。38・39は下半部が欠損している。41・42は断片的な資料、40・43はほぼ完形品である。種子が刻まれているものは５基あり、判読できたものには「バン」（２基)、「キリーク」（１基)、「アーンク」（１基）の３種がある。40の種子は、異なる種子「イ」と「カ」の組合せによるものであると考えられている。38・39・42の種子には金箔で装飾が施されている。38・39は種子だけでなく、その下に配された銘文にも金箔が認められる。文字の彫り方は、幅狭の薬研彫りである。40には「貞治三年七月廿二日」と南北朝時代の北朝年号の紀年銘があり、年代は西暦

1364年である。

古銭

不明古銭が２枚出土している（写真図版６-27･28）。

中・近世の遺物観察表

番号	種　別	出土地点	特　　徴	写真図版	登録
1	青磁　香炉	表土	中国産（明代）。劃花文。高台径 5.8cm、外底のみ露胎。	5- 9	13
2	染付磁器　碗	ＳＥ 40 井戸跡堆積土	中国産（15 世紀後半～ 16 世紀）。見込み：十字花文。口径 13.0cm　底径 5.8cm　器高 5.8cm。	5-10	11
3	染付磁器　碗	ＳＤ 25 溝跡堆積土	肥前産（近世）。見込み：五弁花文。高台径 3.2cm	5-11	35
4	染付磁器　碗	SD45 水濠跡堆積土	切込窯（近世）。口縁 11.3cm　底径 5.0cm　器高 6.7cm	5-19	43
5	染付磁器　蓋	表土	瀬戸・美濃産。内面「寿」銘あり。口径：3.5cm　底径：9.3cm　器高：2.7cm	5-18	67
6	陶器　碗	遺構確認面	瀬戸産。灰釉。外面下端は露胎。	6- 1	12
7	陶器　碗	第４トレンチ遺構確認面	大堀相馬産（近世）。灰釉。高台際～高台内は露胎。高台径：3.8cm	6- 4	81
8	陶器　土瓶蓋	遺構確認面	口径：3.1cm　底径 10.4cm　器高：2.2cm	6- 5	71
9	陶器　壷	第２トレンチ遺構確認面	須恵器系（12 ～ 13 世紀）。外：波状の平行沈線（3 本）　内：ロクロナデ	6- 6	1
10	陶器　甕	SD23 溝跡堆積土	常滑産。内外面ナデ。	6- 7	8
11	陶器甕	SD29 溝跡堆積土	常滑産。内外面ナデ。	6- 8	39
12	陶器甕	SD76 溝跡堆積土	常滑産。内外面ナデ。	6- 9	33
13	陶器甕	表土	常滑産。外：ナデ→平行線押印　内：ナデ→自然釉	6-10	68
14	陶器甕	SD27 溝跡堆積土	常滑産。内外面ナデ。漆継ぎ。	6-11	10
15	陶器擂鉢	第２トレンチ遺構確認面	常滑産。高台欠損。外：手持ちヘラケズリ　内：磨耗痕（平滑）	6-12	2
16	陶器擂鉢	SD23 溝跡堆積土	在地産。内外面ナデ。	6-13	5
17	陶器擂鉢	SD23 溝跡堆積土	在地産。内外面ナデ	6-14	46
18	陶器甕	第２トレンチ遺構確認面	在地産。外：ナデ　内：押さえ・ナデ	6-21	7
19	陶器甕	SD23 溝跡堆積土	在地産。内外面ナデ。	6-16	38
20	陶器甕	SD23 溝跡堆積土	在地産。内外面ナデ。	6-20	6
21	陶器擂鉢	SD27 溝跡堆積土	在地産。外：ナデ。内：磨耗痕（平滑）	6-17	4
22	陶器甕	SD33 溝跡堆積土	在地産。内外面ナデ。	6-18	3
23	陶器鉢	表土	在地産。内外面ナデ。	6-19	9
24	土師質土器　皿	遺構確認面	外：オサエ→口縁ヨコナデ　内：ヨコナデ。口径：13.2cm　器高：2.6cm	6-22	70
25	瓦質土器　火鉢	SD1 水濠跡堆積土	胴。脚付き。	6-23	29
26	木製品 曲物蓋	第１トレンチ沢堆積土	皮帯残存。補修穴２ヵ所。径 26.8cm　厚さ 0.7cm	7- 7	91
27	煙管　雁首	表土	火皿高：0.7cm　首部径：0.5cm　肩部径：0.8cm	6-24	19
28	煙管　吸口	表土	末端径：0.6cm	6-25	19
29	釘	表土	長さ 5.0cm　幅 0.4cm　断面形：方形状	6-26	90
30	フイゴの羽口	表土	先端部に溶けた鉄付着。長さ 5.0cm　直径 7.2cm　孔径：3.0cm	6-29	85
31	砥　石	第１トレンチ沢堆積土	凝灰岩製。長さ 7.9cm　幅 3.8cm　厚さ 1.2cm	7- 3	92
32	砥　石	SD1 水濠跡堆積土	凝灰岩製。長さ 8.3cm　幅 2.2cm　厚さ 1.5cm	7- 2	88
33	砥　石	SD1 水濠跡堆積土	頁岩製。長さ 4.3cm　幅 3.6cm　厚さ 1.6cm	7- 1	89
34	茶　臼	SD1 水濠跡堆積土	下臼～受皿部。直径：24.0cm　高さ 7.5cm	7- 6	14
35	茶　臼	SD1 水濠跡堆積土	受皿部のみ。	7- 4	30
36	茶　臼	SD1 水濠跡堆積土	受皿部のみ。	7- 5	47
37	五輪塔　火輪	SD1 水濠跡堆積土	安山岩製。高さ 19.3cm　幅 30.7cm。	7- 8	93
38	板　碑	SD1 水濠跡堆積土	金装板碑。種子「キリーク」。高さ 31cm　幅 23cm　厚さ４ｃｍ	7-10	27
39	板　碑	SD1 水濠跡堆積土	金装板碑。種子「バン」。高さ 60cm　幅 18 ｃｍ　厚さ 3cm	7-12	26
40	板　碑	SD23 溝跡堆積土	種子「（イとカの組合せ文字）」。紀年銘「貞治三年七月廿二日」。高さ 103cm　幅 26cm　厚さ 4cm	7-13	25
41	板　碑	SD27 溝跡堆積土	「敬白」。高さ 12cm　幅 7cm　厚さ 2cm	7- 9	95
42	板　碑	表土	金装板碑。種子「アーンク」。高さ 18cm　幅 7cm　厚さ 2cm	7-11	28
43	板　碑	表土	種子「バン」。高さ 97cm　幅 39cm　厚さ 6cm	7-14	94

第Ⅴ章　総　　括

縄文時代、古代、中・近世の各時代にわたって遺構・遺物が検出された。ここでは、古代および中・近世の主要な遺構と遺物について検討を行なう。

1　古代

Ｓ区中央で竪穴住居跡１軒を確認した。削平が著しく、かろうじて住居跡の北西部とカマド・煙道の一部が検出できた。住居跡から出土した土師器・須恵器はいずれもロクロ調整である。土師器坏は切離し後手持ちヘラケズリ調整が施されている。須恵器坏は、底部から直線的に外傾しそのまま口縁部に至るもので、法量が大きく椀状を呈する。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整が施されている。年代は９世紀前半に位置付けられるものと思われる。

2　中・近世

(1) 遺構について

区域ごとに、その特徴をまとめる。

＜Ｓ区西・Ｎ区＞

Ｓ区西およびＮ区の沢部分から丘陵斜面にかけて、整地層が２ヵ所認められた。SX10整地層と第２・３トレンチの整地層は分布域が異なるが、いずれも整地土に多くの旧表土や地山ブロックを含んでいることや沢部分に造成を施していることから、沢に平場を造り出すための一連のものと考えられる。盛土整地前には、丘陵斜面の削り出しが行なわれている。整地土は旧表土を含むものであったことから、削られた土を沢部分に積んで整地したものと思われる。

整地層を基準に遺構の重複関係をみると、①SK58土坑→②SX10整地層：SD23溝跡→③SD１水濠跡・SD２溝跡という３時期の変遷が考えられる。各期の年代を推定すると、②期はSX10整地層に伴う遺構でSD23溝跡から常滑産や在地産の中世陶器鉢、南北朝期（1364年）の紀年銘をもつ板碑が出土しており、中世の遺構と位置付けられる。SD23溝跡の杭跡（Ｐ２）に残存していた木片の年代測定を実施したところ、平安時代後期に相当するとの結果を得た。これは『石森村明治風土記』で示された平泉藤原氏時代の石森館と年代的に一致することから、この頃に築かれていたといわれる石森館に伴う遺構の可能性も考えられるが、調査結果と隔たりがあるため、これをもって時期を特定するには根拠が乏しく、詳細は不明である。常滑産の中世陶器甕が出土したSD76溝跡も②期に属すると考えられ、重複関係ではSD23溝跡よりも古い。③期は、SD１水濠跡から15～16世紀の瓦質陶器の火鉢が出土しており、この年代以降のものと考えられる。このSD１水濠跡は「登米郡石森村笠原縫殿在郷屋敷絵図」に描かれている水濠に該当するものと考えられることから、少なくとも絵図が製作された天和元年（1681）には存在していたことになる。その他の遺構からは、年代を裏付けるものは出土していない。

当地区は、柱穴は認められたが掘立柱建物跡として認識できたものはなく、溝に近い部分であり、

炭化物や焼土が多量に堆積するSK21土坑やSK58土坑の存在や、周囲から鉄滓が見つかっていることなどから、居住の場とは異なる使われ方がされていた区域である可能性がある。

＜Ｓ区中央＞

丘陵頂部で掘立柱建物跡が２棟みつかり、丘陵尾根の先端部分を削り出した居住域と推定されるが、大きく削平を受けており詳細は不明である。北に隣接する第５～７トレンチでは遺構は分布せず、丘陵先端部に限られている。掘立柱建物跡は、庇や張り出しが付かない桁行4間×梁行１～２間の長方形を呈する単純なものである。

SD25溝跡から肥前産の近世磁器が出土しており、近世の遺構と考えられるが、その他の遺構からは、年代を裏付けるものは出土していない。

＜Ｓ区東＞

丘陵上から裾部にかけて延びるＴ字状のSD27溝跡が検出され、これと方向を揃える掘立柱建物跡や井戸跡が当溝跡の北および南でまとまってみつかったことから、当地区は区画溝を伴った屋敷跡と考えられる。掘立柱建物跡は、庇や張り出しが付かない桁行２～４間×梁行１～２間の長方形を呈する単純なもので、重複がある。また周辺から柱穴、土坑、小規模な溝跡が数多く見つかっていることから、長期間屋敷地として機能していたものと考えられる。SD27溝跡がさらに丘陵上を延びていることや、ほかに区画の遺構が見当たらないことから、区画の範囲や基準などは不明である。

区画溝であるSD27溝跡やSD29溝跡から常滑産や在地産の中世陶器鉢・甕が出土しており、中世の遺構と位置づけられる。また、SE40井戸跡から15世紀後半～16世紀の中国産染付碗が出土しており、この年代以降のものと考えられる。したがって、この屋敷は中世以降に営まれたものと考えられる。

(2) 館跡について

館跡南東部の調査によって、遺構の分布範囲やその様相の一端が明らかとなった。この区域は絵図における「家中屋敷」が置かれたところである。Ｓ区西からＮ区にかけては、沢に盛土整地した平場の造成や水濠近くの遺構の一端が明らかとなった。盛土整地といった造成事業を含め遺構期が３期あり、遺構の改築および重複が認められた。Ｓ区東は、中世の屋敷地の一角を成すものと推定された。また、掘立柱建物跡はＳ区中央とＳ区東で確認したが、建物方向や堀方埋土の違いから、時期が異なる可能性がある。

遺物は、常滑産や在地産の中世陶器を中心として、12～13世紀の須恵器系陶器、13世紀末～14世紀の古瀬戸、15～16世紀の中国産磁器（青磁・染付）、近世期の肥前産磁器や大堀相馬産陶器などの陶磁器類や茶臼といった日常生活品が多い。この他にも板碑や五輪塔といった信仰に関するものもある。本館跡では、弘安三年（1280）から応永十九年（1412）に至るまでの板碑の造立が確認されている（中田町史編さん委員会2004）。遺物は大半が表土から出土したもので、遺構に伴うものはわずかであるが、本館跡が中世から近世まで存続していたことが明らかとなった。このことは、文献で記された中世における石森氏の居館、近世における笠原氏の居館としての石森館を裏付けるものである。

(3) 金装板碑について

中田町では、569基の板碑が確認されている。これは、旧桃生郡河北町の641基、旧石巻市の621基に次ぐ多さである（中田町史編さん委員会2004）。今回の調査で、６基の板碑が出土した。このうち３基が金で種子や銘文が装飾された、いわゆる「金装板碑」であった（第16図38・39、第17図42）。いずれも金の残存状況は良好で、39は種子の彫り込み部のすべてにわたって金が付着していた。39に付着した金の分析を実施したところ、金泥ではなく金箔であることが判明した。しかし、金箔を固定する接着剤については特定できなかった。

県内の板碑群の調査報告として、旧桃生郡河北町に所在する海蔵庵板碑群がある。137基のうち12基が金装板碑であった。石組構築時に地中に埋没した部分のみに金箔が残っており、地上で露出していた部分には残っていなかった実例に触れ、金箔の施された板碑の実数はかなり多かったのではないかと考えている（宮城県教育委員会1999）。

金装板碑は決して例外的なものではなく中世を通じてかなり一般的に存在したものと考えられている（千々和1988）。また、東京国立博物館所蔵の関東地方の遺跡から出土した板碑（178基）における研究報告でも、比較的多くの金装板碑が認められたとある。また、金箔の保存状態があまりに良い例などは、板碑を製作後早い段階で宗教的な意図などの目的を持って埋納された可能性が高いことを指摘している（東京国立博物館2004）。

これまで本館跡からは明治25年に「金箔せるもの三枚」が出土し（「登米郡史」）、今回の調査でも高い確率で金装板碑が含まれ、しかも非常に金箔の保存状態が良いという特徴がある。これは、上記のような埋納の可能性や埋没状況など様々な要因も考えられるが、今後の資料の増加と研究の進展を待ちたい。

第Ⅵ章　まとめ

１．石森館跡は、登米市中田町石森字前田地区に所在する独立丘陵（石森館山）上に立地する。調査の結果、縄文時代、古代、中・近世の遺構・遺物を検出した。

２．縄文時代は、土器や石器が若干数出土した。遺構は確認されなかったが、近辺に縄文時代の遺構があるものと考えられる。

３．古代は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、柱穴群を検出した。土師器、須恵器が出土し、年代的には9世紀前半に位置づけられる。

４．中・近世は、掘立柱建物跡８棟、水濠跡２条、溝跡（溝状遺構を含む）21条、井戸跡５基、土坑14基、整地層２ヵ所を検出した。Ｓ区西およびＮ区の沢部分から丘陵斜面にかけては、平場を造り出すための造成事業が認められた。Ｓ区東では区画溝（ＳＤ27溝跡）をもつ中世の屋敷跡の一端が明らかとなった。遺物は中世から近世の陶磁器類、木製品、金属製品、土製品、石製品、古銭などが出土した。

５．板碑は６基出土し、このうち３基は金箔で種子や銘文が装飾されたいわゆる「金装板碑」であり、金箔の残存状況は良好なものであった。

参考・引用文献

愛知県史編さん委員会（2007）:『愛知県史別編窯業２中世・近世瀬戸系』
池田雅美（1985）:『豪族集落の研究』大明堂
加藤正久（1990）:『石仏偈頌辞典』国書刊行会
田口勇・斉藤努（1994）:「東北地方産古代砂金の自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告第57集』
千々和到（1988）:『板碑とその時代』平凡社
中世土器研究会（1995）:『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
東京国立博物館（2004）:『東京国立博物館所蔵板碑集成』
東北中世考古学会編（2003）:『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
中田町教育委員会（2003）:『十二神山遺跡』中田町文化財調査報告書第4集
中田町教育委員会（2004）:『中田町の板碑』中田町文化財調査報告書第5集
中田町史編さん委員会（2005）:『中田町史改訂版』
日本貿易陶磁研究会（1982）:『貿易陶磁研究№２』
迫町教育委員会（1995）:『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第２集
藤沼邦彦（1977）:「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要第３巻』
宮城県教育委員会（1981）:「八沢要害遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集
宮城県教育委員会（1983）:「八谷館跡・御所館跡・駒場館跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第93集
宮城県教育委員会（1990）:『上野館跡』宮城県文化財調査報告書第156集
宮城県教育委員会（1992）:「二ッ木館跡」『金鋳神遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第150集
宮城県教育委員会（1999）:『海蔵庵板碑群』宮城県文化財調査報告書第180集

付　　篇

石森館跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

石森館跡は、宮城県登米市中田町石森字前田に所在する。測定対象試料は、SD23溝跡の底面から出土した木片（登録No.97：IAAA-81789）である。SD23は低丘陵の裾部に位置する。

2　測定の意義

試料は溝跡の底面に打ち込まれた杭であり、SD23の時期を明らかにしたい。石森館跡については、中世から近世とする記録が残る。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（2）酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（3）試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

（4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（6）グラファイトを内径１mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は、３MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron ９SDH-２）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（3）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（4）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

（5）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測定結果

SD23底面出土の木片の^{14}C年代は、980±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、1018～1046AD（(36.1%)・1093～1121AD（25.4%）・1140～1148AD（6.6%）であり、平安時代後期に相当する。試料の炭素含有率は約60％であり、十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C（‰）（AMS）	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-81789	登録 No.97	遺構：SD23溝跡　層位：（底面）	木片	AAA	-30.10 ± 0.48	980 ± 30	88.51 ± .33

［#2535］

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ暦年代範囲	処 2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-81789	1,070 ± 30	87.58 ± 32	980 ± 30	1018AD-1046AD（36.1%） 1093AD-1121AD（25.4%） 1140AD - 1148AD（ 6.6%）	993AD - 1059AD（45.9%） 1068AD - 1155AD（49.5%）

［参考値］

参考文献

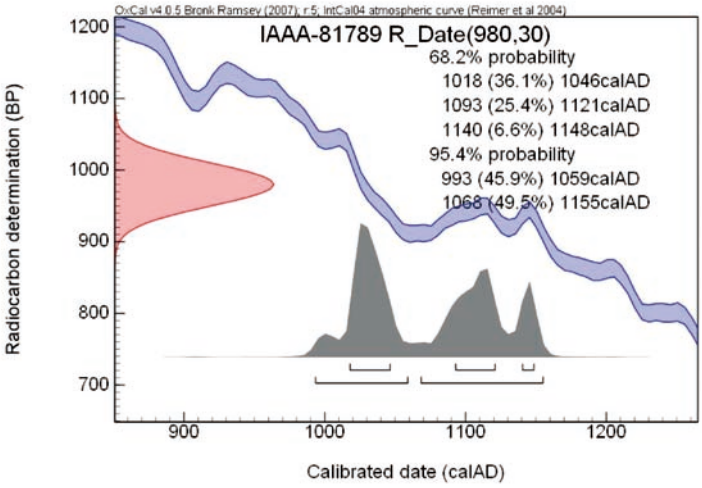
Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk *Ramsey* C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



［参考］暦年較正年代グラフ

石森館跡出土板碑付着金箔の自然科学分析

竹原弘展・藤根　久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

石森館跡より出土した板碑は、種子に金箔が貼り付けられているものが確認されている。ここでは金箔およびその接着方法について検討するため、自然科学分析を行った。

2. 試料と方法

分析対象資料は、板碑種子に付着する金箔である（図版１-①）。まず金箔について、走査型顕微鏡による観察、および付属するエネルギー分散型X線分析装置による元素分析を行い、また、接着の際に漆が使用された可能性があることから、漆の確認を行うため赤外分光分析を行った。分析に際しては、金箔の観察・分析を竹原が行い、赤外分光分析を藤根が行った。

【金箔の観察・分析】

板碑の金箔付着部分の一部にセロハンテープを接着する形で極少量採取して分析試料とした。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性分析を行った。

【赤外分光分析】

剥離した金箔１mm角部分を押しつぶして厚さ１mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3. 分析結果および考察

【金箔の観察・分析】

SEM反射電子像を図版１-②, ③に示す。また、エネルギー分散型X線分析装置による分析スペクトルを図１に示す。金（Au）および銀（Ag）が検出された。

SEM反射電子像を見ると、破れなどは見られるものの、基本的に非常に薄く、平滑な膜状であった。このことから、金泥や、あるいは（石地のため可能性は極めて低かったが）鍍金などが使用されたのではなく、金「箔」が使用されていることが自然科学的観察からも改めて裏付けられたといえる。金箔の場合、金箔のみで石地に固定することは無理と考えられ、何らかの接着剤を使用して固定していたと推定される。また、元素分析の結果より、少量の銀が混ざっていることが判明した。

【赤外分光分析】

図２に、赤外吸収スペクトル図を示す（試料が実線、生漆が点線で示す）。縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber（cm^{-1}）；カイザー）である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、

吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表１）。

赤外分光分析を行った結果、生漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（№６～№８）は確認されなかった。なお、波数が1000（cm^{-1}）以下の部分に無機物として金の吸収が強く検出されていることから、ウルシオールの吸収が検出されなかったものと考えられる。また、生漆の吸収ピークの№１および№２の吸収ピークが見られたことから、漆が使用された可能性はある。

表１　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収№	生　漆		ウルシ成分
	位　置	強　度	
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

4. おわりに

石森館跡より出土した板碑に付着する金について分析した結果、金箔であることが裏付けられた。一方、金箔を固定する接着剤については、一部接着剤由来と考えられる吸収ピークは検出されたものの、特定には至らなかった。

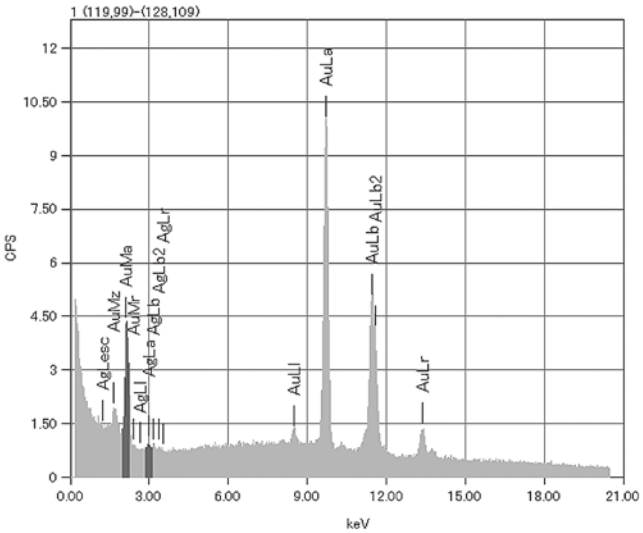


図１　金箔のＸ線スペクトル

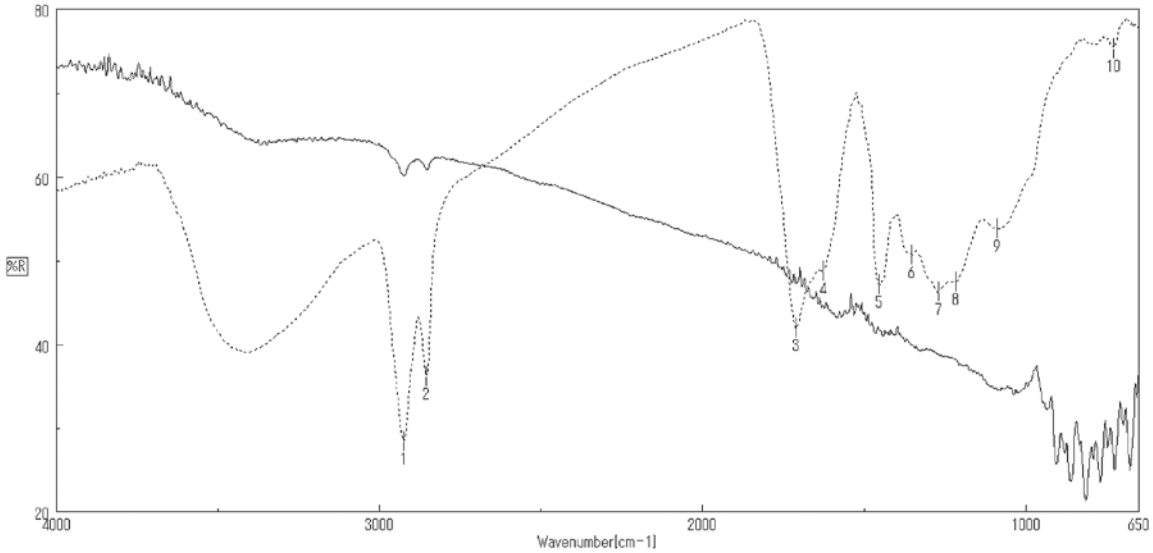
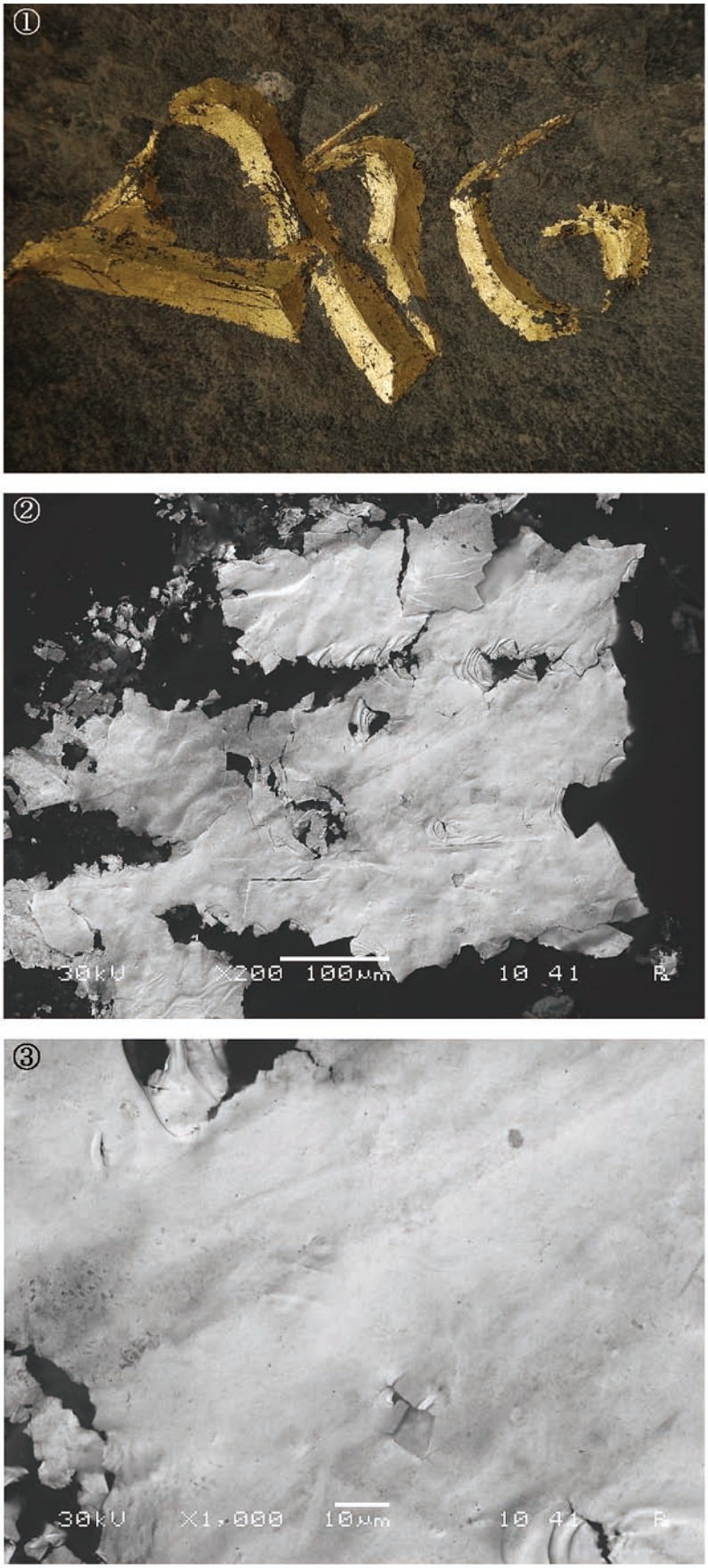
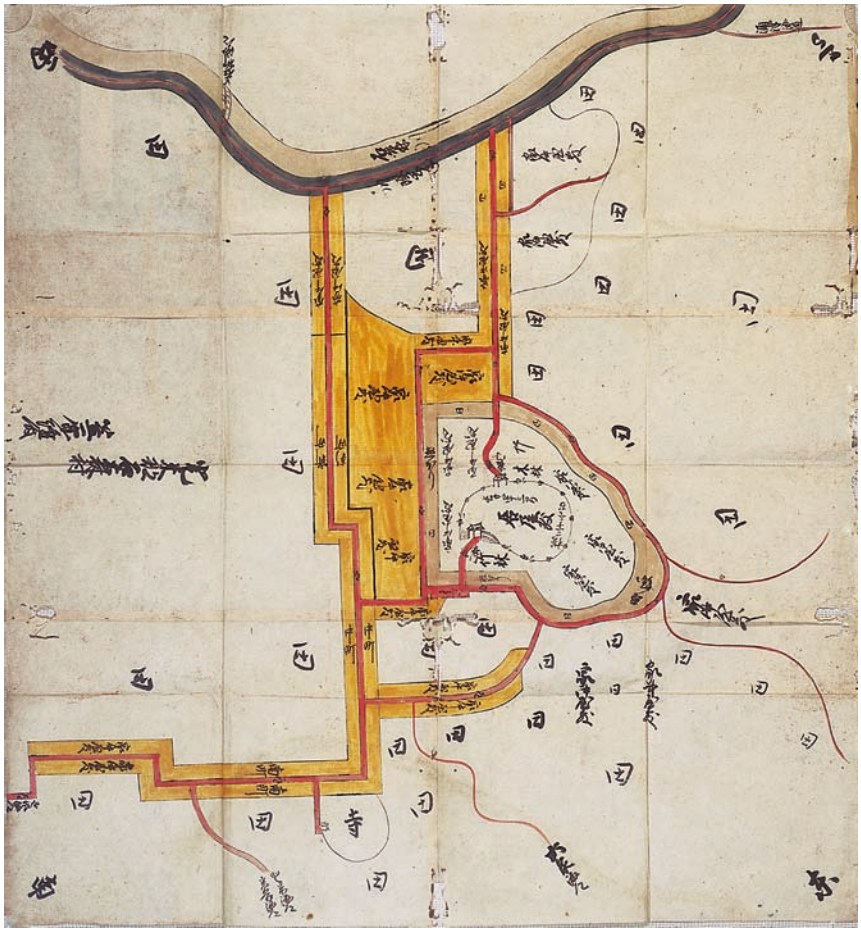


図２　金箔層の赤外分光スペクトル図（点線の番号：生漆の吸収）



図版 1　金箔付着状況および SEM 反射電子像

写 真 図 版



「登米郡石森村笠原縫殿在郷屋敷絵図」平成元年（1681） 製作（宮城県図書館所蔵）

調査区遠景（南西から）

写真図版 1

S 区中央　SI24 住居跡（南から）

S 区西　古代の柱穴群（南東から）

S 区西全景（南西から）

S 区西　SD23 溝跡（南から）

S 区西　SD2 溝跡（北西から）

S区西　SD23溝跡P2杭跡（北から）

S区西　SX53溝状遺構（北から）

写真図版２

S 区西　SE63 井戸跡（東から）

S 区西　SE13 井戸跡（西から）

S 区西　SK21 土坑断面（北から）

S 区西　SK58 土坑断面（南西から）

S 区中央　全景（南から）

S 区中央　SB70 建物跡（南東から）

S 区東　全景（南西から）

S 区東　SD27・34 溝跡（北東から）

写真図版３

S 区東　SB55・56 建物跡（東から）

S 区東　SE40 井戸跡（南から）

S 区東　SD45 水濠跡断面（南から）

N 区　第 1 トレンチ（南西から）

N 区　第 2・3 トレンチ（南東から）

N 区　第 8・9 トレンチ（南西から）

現地説明会

現地説明会

写真図版 4

1（5 － 1）

2（5 － 2）

4（8 － 1）

6（8 － 2）

3（5 － 3）

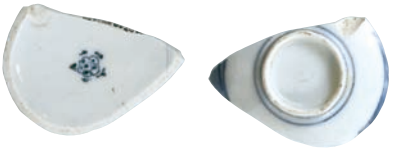
5　土師器甕（SI24 堆）

7（8 － 3）

8（8 － 4）

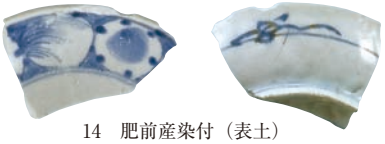
9（14 － 1）

10（14 － 2）

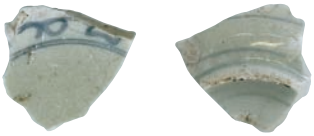

11（14 － 3）

12　肥前産染付（表土）

13　肥前産染付（SD25 堆）


14　肥前産染付（表土）

15　肥前産染付（表土）


16　肥前産染付（表土）

17　肥前産染付（表土）

18（14 － 5）

19（14 － 4）

1 ～ 19：縮尺 1/3
（ － ）：図 No.

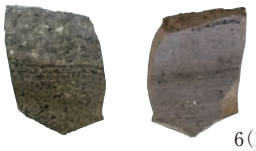
写真図版 5

1（14 － 6）

2　古瀬戸深皿（表土）

3　瀬戸美濃産陶器（確認面）

4（14 － 7）



6（14 － 9）

5（14 － 8）

7（14 － 10）

8（14 － 11）

9（14 － 12）

10（14 － 13）

11（14 － 14）

12（14－15）

13（14 － 16）

14（14 － 17）

15　在地産
中世陶器
（SD23 堆）

16（15 － 19）

17（15 － 21）

18（15 － 22）

19（15 － 23）

20（15 － 20）

23（15－25）

21（14－18）

22（15－24）

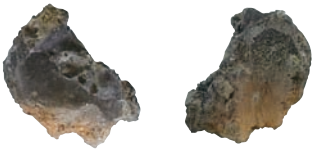
24（15 － 27）

25（15 － 28）

26（15 － 29）

27
古銭（SD1 堆）

28　古銭（SD2 堆）



29（15 － 30）

1 ～ 29：縮尺 1/3
（ － ）：図 №

写真図版 6

1（15 － 33）

2（15 － 32）

3（15 － 1）

6（15 － 34）

4（15 － 35）

5（15 － 36）

7（15 － 26）

8（15－37）

9（17 － 41）

10（16 － 38）

11（17 － 42）

12（16 － 39）

13（16 － 40）

14（17 － 43）

1～7：縮尺 1/3　8～14：縮尺 1/8
（ － ）：図 №

写真図版 7

報　告　書　抄　録

ふりがな	いしのもりたてあと
書名	石森館跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第220集
著者名	佐藤　貴志
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL 022－211－3685
発行年月日	2009年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
石森館跡（いしのもりたてあと）	宮城県（みやぎけん） 登米市（とめし） 中田町（なかたちょう） 石森（いしのもり） 前田地区（まえだちく）	042129	54001	38° 43′ 22″	141° 12′ 50″	20080526 ～ 20080828	約2470㎡	県道石森 永井線 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石森館跡	館跡	古代	竪穴住居跡1軒	土師器　須恵器	
		中世～近世	掘立柱建物跡8棟 水濠跡２条 溝跡21条 井戸跡５基 土坑14基 整地層２ヵ所	陶磁器（青磁・染付）木製品（曲物）金属製品（煙管）土製品（フイゴの羽口）石製品（金装板碑）古銭など	中世石森氏および近世笠原氏の居館跡

要約

石森館跡は、宮城県登米市中田町石森地区の独立した小高い丘陵上に位置する遺跡である。今回の調査で古代の竪穴住居跡、中・近世の掘立柱建物跡、水濠跡、溝跡、整地層などを検出した。竪穴住居跡は出土遺物から９世紀前半と位置付けられる。中近世の遺構は当時の屋敷の一部を構成するもので、遺構の改築および重複が認められた。遺物は、中・近世の陶磁器類、板碑などが出土した。その状況から、中世石森氏および近世笠原氏の屋敷地として継続的に営まれたことが裏付けられた。

宮城県文化財調査報告書第220集

石森館跡

平成21年３月19日印刷
平成21年３月25日発行

発　行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24